

---

# 平行幻想

りこぴん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平行幻想

### 【コード】

N8453K

### 【作者名】

りこぴん

### 【あらすじ】

プロローグを読んでください

## プロローグ

### プロローグ

この世界には平行世界が幾つも存在する、その中には、自分が既に死んでしまっているかも知れない。  
パラレル・ワールド

これは、平行世界の内の一つの物語…

ここは日本、但し今、我々が居る日本とは違い、科学ではなく、魔術、錬金術が発達した世界である。

人々は魔術、錬金術の力により、世界は一つになり、人類は恒久の平和を手に入れた…：はずだった。

それは突如現れた、空よりやってきた謎の建造物が太平洋に落ちた 刹那、太平洋の海全てが焦土と化してしまった。

この異変を察知した魔道師ギルドは調査隊を派遣、直ちに現場を報告するように指示した…。

同じ頃、錬金術師ギルドも同じように調査を開始、焦土の物質の採取を命じた…

だが、3ヶ月後両ギルドが得た結果は、部隊の全滅という結末だった…

その結果を聞いた国際連合国は謎の建造物に対する攻撃準備を始めた…

結果は惨敗、圧倒的な数で勝る連合軍に対し、個々の能力で勝る未確認軍はスピードを駆使し、瞬く間に勝利した…

その後、前回の報復と言わんばかりに未確認軍は世界各地に進

撃、僅か数週間で各地の主要都市を再生不能なまでに破壊し、風のように元の場所に戻って行った。

その後、主要都市を失ってしまった国際連合は事実上の滅亡の道を辿っていった……が、まだ戦う意思のあったものは各地でレジスタンスを蜂起、その中でも一番戦力が高く、謎の建造物に最も近かった日本周辺のレジスタンス「タイタン」が近々敵本拠地に大規模な攻撃を仕掛けるという情報が流れた…

## ブログ（後書き）

これは、私のブログでもやってる作品で、知り合い以外の他の方にも読んでもらいたかったので、ここに投稿してみましたw面白くなかったらごめんなさい^^;

## 第一話

「ふう、今日から魔道師ギルドに所属しないといけないのか」

魔法学校を卒業し、正式な魔道士になった俺は、一年前に世界各地を破壊した未確認軍、通称UMA軍を討伐するためのレジスタンスに所属することになった。

そのレジスタンスに属しているのが、全国の魔道師が所属必ず所属しなければならない、「魔道師ギルド」同じように、「錬金術師ギルド」「戦士ギルド」などが挙げられる。

それで、俺は今からギルドに属するための手続きを済ませるといふ非常に面倒な作業をしなければならなくなった。

「えーっと、これとこれにサインっと、ああーもう多いな！」

ホントに多かった、多分50枚位はあったかもしれない。

「そんなことで弱気になってるようじゃ、一人前の魔道師にはなれないぞ？」

「え？」

いきなり現れ、声を掛けてきた男の姿の確認した俺は、とてつもなく焦った。

「ク、クルスギルド長!？」

そりゃ焦るよ…なんてっただって魔道師ギルドの頂点に君臨するクルス大導師がいきなり俺の前に現れたのだから。

「おや、驚かせてしまったようだね、すまない」

「そんな、謝るのはこちらの方ですっ、お声を掛けていただきながら素っ気な反応をしまい申し訳ありません!！」

「いやいや、そこまでしなくてもいいよ、それで、今回は君に用事があったんだ」

「私にですか？」

「ああ、そのまえに一応確認しておくけど、君はシャノン君かな？」

「ええ、そうです」

「ありがとう、で、本題に入るけど、我々の属しているレジスタンスがこの度UMA軍に対して大規模な攻撃を仕掛けることになった、そこまでの情報はしってるかね？」

「はい、噂程度ですが一応」

「それで、その作戦の成功の為に、周辺の土地の探索及び、マップの作成を行ってもらうために、3人で一組の小隊を派遣することになった。」

「で、その一隊のメンバーに私が選ばれた、と言うことですね？」

「話が早いね、では、その書類は書かなくていいからいまから私のところまで来てくれるかな？」

「ちよつと待ってください、何故私が選ばれたのでしょうか？」

「理由かい？それは、君が魔法学校でもトップの成績だったからだよ……」

「そう…ですか」

「何か不満でも？」

「いえ、そういう訳ではないのですが、ただ、調査と言うとあの時の事が思い出されますから……」

「部隊の全滅か……」

「はい」

「あの時は、我々魔道師だけの部隊だったから戦闘能力は偏っていた、だが今回は違う、君の隊には戦闘員養成所、錬金術学校の成績トップの者が配属されることになった、新米だが、実力はレジスタンスそのものからも太鼓判を押されるほどだ、勿論君もな」

「そうですか、分かりました、行きます」

もちろん嫌さ、一度部隊が全滅したところに行かされるなんて、それも3人で。

でもクルス大導師なんかには逆らえる訳がない、どうやら遠回しな死の宣告に従うしかないらしい……

「じゃ、早速行こうか、速移の術は使えるかい？」

「はい、一応使えます」

「流石だな、それ位は余裕か」

流石、といわれても、速移の術は初歩だから大体の魔道士が使えるけどな。

さすがトップに立つ者は人の扱いがうまいよ。

「じゃ、こっちの方だから付いてきてね」

「あ、はい」

さて、行くか…もうこうなったらヤケクソだ！

おれは術を使うために少し精神を集中させた後、前にいるクルス大導師に付いて行った。

遠いな。

かれこれ10分は移動してるだろう、一体どこにあるんだ？集合場所とやらは。

それにしても話せないのは限りなく暇だ、なぜなら、俺たち魔道士は遠移を使っているときは声に出して喋ることはできない、だから心話の術を使って、脳に直接話しかける方法をとっている。だが、今この場にいるのはクルス大導師だけだ、明らかに話しかけられない。

「シャノン君、聞こえるかい？」

と、考えていたら向こうからきた。

「はい、聞こえます」

「その…：すまない」

「え？」

「実は、君たち新人りを部隊に組み込んだ事を後悔しているんだ」

「でも、部隊を決めたのはクルス大導師ですよね？」

「正確には選んだのはレジスタンス長のレノアス閣下だ」

「そうだったんですか…」



「私も当初は反対したよ、流石に将来が期待できる君たちの命をわざわざ投げ出させるようなことはしたくなかったからね」

「でも、レノアス閣下に押し切られた訳ですね」

「ああ、そういうことだ、すまない」

「いえ、謝ることはありませんよ、私も決心が付きましたから」

「そうか、強いな、君は」

「クルス大導師程ではないです」

「大導師だなんて堅苦しい言い方はやめてくれ、クルスさんでいい」

「はい、絶対に帰ってきますクルスさん」

「頼むから死なないでくれ、私ができたのは君の隊の人員を調整したぐらいだったが」

「それだけでも十分です、このご恩は忘れません」

「そういつてくれると助かるよ、おっともう着くからね」

「はい！」

「帰ってきてもう一度その声を私に聞かせてくれよ」

「その命、我が命に賭けても遂行致します」

「おいおい、死んだら元も子もないよ」

「そうでしたね」

「さて、着いたよ」

「うわぁ」

そこは洞窟の中だった、その中には、見た感じ戦士、錬金術師、魔道士の3人グループが沢山集まっていた。ざっと見た感じ2000位の小隊かな？

これの何隊が生きて帰って来れるのか…

正直不安だ。

「じゃ、私はレノアス閣下のところに行かないといけないから、これで失礼するよ」

「分かりました、で、私の隊のメンバーはどこに？」

「ああ、そうだった、君のメンバーはね、そのこの広場のクリス

タル前に集まるように言っている、おそらくもう居るはずだ、メンバーかどうかの確認はこのバッチを渡しておくから、これと同じ物を付けているのが君のメンバーだ」

「了解です、クルスさん」

「じゃ、私はいくよ、頑張つてね」

と、言うとクルスさんは、黒い闇に包まれたかと思うと突然消えてしまった…遠移を使うと外からはああやって見えるのか…すごいな。

さて、クリスタル前だったな、行くか。

それにしても両学校の成績トップか…一体どんな奴だろうか？まあいい、とりあえずこのバッチと同じ奴を探すか。

お、クリスタルの前に二人居たぞ、とりあえずフード被ってさりげなく確認するか。

同じやつだ、じゃ一旦遠くまで

『おい』え？

「？」

二人・『シャノンお前だよ、そのバッチ』 『私たちと一緒にの隊でしょ？』

「その声は、まさかシオンにマサキか？」

「大正解！ いやあまさかシャノンが私たちの一緒にの隊だったとは」

「ホントだよ、最初来るのは魔法学校の成績トップ者って聞いてたからさっきまで僕とシオンとでシャノンじゃないことは確かだった話してたところだから」

「お前らなかなか酷いぞ」

「ごめんごめん、で、3年振りかな？ シャノンとは」

「そうだな、お前とシオンは方向が一緒だから毎日会ってるだろうけど、俺は真逆だったからな」

「シャノン？ 寂しかったの？」

「そ、そんなことはないよ…、そういうシオンはどうなのさ」

「あんたが一人居ないだけで私が寂しがる訳ないでしょうが」

「おわっ」

いきなり殴られそうになった、懐かしいなこの感覚、それにしても3年か長かったな…

「チツ、避けられたか」

「聞こえる声で言うのやめてもらえます?」

「シャノンすごいねーシオンのパンチ避けられたんだ」

「こいつら酷すぎる、感動のかの字も無いぞ?」

「当たり前だ、これでも魔道士だぞ?」

「あ、そっか、私が錬金術師で、マサキが戦士だからお前が魔

道士か…似合うな」

「あんまり嬉しくないけどな」

「僕もその格好似合ってると思うよ?」

「どのあたりがだよ?」

「二人『全体が』」

「そろって言われると流石に凹む」

「まあまあ（僕もシオンに戦士の格好似合ってるねーって言われ

たから）」

「ごめんマサキ、俺もお前の戦士姿は似合ってないと思う…」

「あんたも共犯だよ」

「マジか」

「うん」

「シオン、お前が言うな」

「それにしても、やっぱり楽しいね、久しぶりに喋ると」

「そうだな」

確かに楽しい、魔法学校ではひたすら勉強だったからな…

「搜索隊のメンバーは直ちに隊のメンバーで集合し、広場に集まるように」

「レノアスさんの声だね、集まるっか」

「そうだね（シオンの錬金術師の正装が異常に似合ってるよね）」  
「そうだな（ああ、あいつはあんな感じの服が似合うよな）」  
実際、マサキの戦士姿は似合ってるが、一方のシオンはとうとかなり似合っていた。

「どうしたの？早く行くよ」

「はいはい」

さて、他の隊も集まりだしたな…俺らは…一番前か。

レノアス閣下はまだ出てこないな…そういえば心話は魔道士以外でも使えたんだな、試しにシオンにでも話しかけてみるか。

「シオン、シオン聞こえるか？」

「え？今シャノン喋った？」

どうやら聞こえたようだ、だが返事の仕方が分からないみたいだな。

「シャノンなら一言も喋ってないよ、と言つか寝てる？」

「あれ？おかしいな…気のせいかな」

マサキ、お前中学のときから変わってないな…よくそれで戦士学校をトップで卒業したな、おい。

さて、もう一回送ってみるか。

「シオン聞こえてるなら、気を集中させて頭の中で喋ってみろ」

「こ、こっかな？」

どうやら出来たみたいだ、流石だな。

「そうそう、これが俺達魔道士の魔術の基本の心話の術だ」

「これが心話ね、錬金学でも魔道に関しては少しだけ習ったけど使えないから意味ないと思ってたよ」

「普通は俺達魔道士しか使えないんだけど、こっちから話しかけたら、話しかけられた方は、さっきシオンがやったようにすれば心話を使えるんだ」

「なるほど、流石トップな訳あるね」

「まあな、これでもお前らに少しでも近づくと必死で勉強し

たからな」

「あんたも苦労したんだね」

「ああ、それと、この心話で喋るには精神力が必要だからあまり喋り続けると疲れるよ」

「ああ、その辺りは大丈夫だよ？ 錬金学でも最初は精神力を高める授業だったから、最初はいらなと思うってたけどこのためなんだね」

「その喋り方見る限り大丈夫そうだな、錬金学で教えてもらわなかったか？ 素材を集める時は魔道師に同伴して貰うこともあるって、俺はクルスさんに教えてもらったぞ？」

「習わなかったなね… また使う時が来るの一点張りだったから」

「そっか、マサキにでも声を掛けてみるよ」

「じゃあねー」

さて、シオンの精神力は予想以上だった、流石錬金術師とでも言おうか、次はマサキにでも声を

「集まったな、ではこれより点呼を行う、各員整列！！」

おっと、タイミング悪いな、まあいい、あとにするか。

「全員いるな、よし、只今より今回の作戦の説明を行う、君たちの任務は敵本拠地周辺の調査、探索及び、地図の作成をしてもらう。一隊の人数は3人、戦士、錬金術師、魔道師のメンバーで行ってもらう、尚、この度の調査は元太平洋の中心部に現れた建造物の周辺と言うことで、調査範囲は勿論太平洋と同じ広さを調査してもらうことになる、この為、一部の隊は目的地に着くまでに、かなりの時間が掛かってしまうかもしれないが必ず調査してくるように！ さぼってしまった場合その周辺の様子が分からず、我々の本隊が全滅するかも知れない。この為にも、各員には、決死の思いで調査に励んでもらいたい、以上！！」

長いな… この人の話、しかも調査ってそんなに広範囲なのかよ、アメリカの方に当たった奴は可哀想だな… っといけないな、こういう時にこんなこと言う俺たちに当たりかねんからな…

「次は、魔道師ギルド長、クルス大導師からの話だ、魔道士の奴はよく聞いておけ」

「やあ、こんにちは、魔道師ギルド長、クルスだ、今回の作戦開始時より魔道士は魔道師に昇格、さらに我々魔道師の最大の法律である「魔道十二条」の適用を無しにし、出し得る精一杯の力で調査に励んでもらいたい、私からは以上だ」

「では、話も全て終わったところで、早速調査に向かってもらいたいと思う。まずは、バッチに書いてある数字の順番に調査地区を決めていくから、番号の若い順に私の所へ来い」

えーっと、俺たちの番号は…1番!？」

トップだからか?なるべく近い所に当たると良いな。

「シャノンーどうしたのシオンが呼んでるから早く行くよ?」

「ああ、分かったすぐ行く」

「レノアス閣下、調査隊1番、メンバー全員到着です」

「よし、では、早速君たちに行ってもらおう所は、ミッドウエー諸島付近に行ってもらいたい、敵の本拠地に近いが、一番大事なところだ、ここは何としてでも調査してほしい、そして可能ならば本拠地に潜入、対象の破壊を命じる」

「え、ちよっと待ってください、私たち3人で破壊なんて出来るわけではないじゃないですか!」

「それも承知だ、だがな、例え調査が出来たとしても無事に帰って来れるかも分からん、だから、君の心話で報告が届き次第、君たちと同じルートを通り、本拠地に近付くつもりだ、その時に君たちには先鋒の役割にもなつて欲しいのだ」

「要は、僕たちは鉄砲玉ですね…」

「悪い言い方をすればな、だが君は優秀な戦士じゃないか、君ならできるぞ」

「ですが、マサキとシャノンは良いとして、私の場合はどうすればいいのですか?」

「君は錬金術師だな?名前は?」

「シオンです」

「君がシオンか、錬金術ギルド長より預かり物があるのだった」  
「リリカギルドマスターからですか？」

「ああ、なんでも古代より伝わる錬金術の禁忌が書かれた本の  
ようだ、今回の作戦で使う時が来るはずだ、と言う伝言も頼まれた」

「少し読ませていただきます…」

そう言うつとシオンはパラパラと読み始めた、横からちよつと見  
させてもらったが、さっぱり読めなかった…何語なんだ？それは、  
あとで聞いておくか。

「凄い…、ですがこれは禁止されているはずです」

「そのことだが、リリカの奴が使つてもいいと言っていた」

「力は出し惜しみしない、と言うことですね」

「ああ」

「僕には何もありませんか？」

「君はマサキだったかな、君は後で戦士ギルド長の所まで来る  
ように、と伝言を預かっている」

「了解です」

「そして、シャノンだったかな、君には」

「それは僕から話そう」

「クルスさん！？またいきなり…」

「ごめんごめん、私からはこれだ」

「これはクルスさんのネックレスと指輪？」

「その通り、私のアクセサリには少しばかり私の魔力が宿つて  
いるから、多少の役には立つだろう」

「ありがとうございます、必ずお返ししますね」

「あと、これも」

「新しい服ですか…」

「ああ、流石にそのみすばらしい黒ローブじゃ見た目が悪い、  
お下がりだが私がギルド長になる前の服をあげよう」

「もしかしてこれにも魔力が…」

「いや、単に見た目の問題だ」

「そうですか」

「うん、じゃ、僕はこれで」

「ねえ、シャノン、クルス大導師ってあんな軽い感じなの？」

「ああ、さつきからあんな感じだ」

クルスさんはホントに軽い感じだ、なんだか友達と喋ってる感覚になつてしまつ、だからこそそのギルド長かもしれないな。

「クルスの奴は昔からあんな奴だ」

「レノアス閣下はクルス大導師のことを知っているのですか？」

「ああ、ちょうど君たちと同じころ　これ以上話すと、長引くからやめておく、マサキ、お前も待たせている相手がいるのだぞ？」

「も、申し訳ありません」

「では、私たちはこれで」

さて、戦士ギルド長はどこにいるんだ？といつてもマサキが知ってるか、あいつに付いていくか…

「アクセル戦士長ならあっちにいるから二人とも付いてきて」

「はいはい」

さて、アクセル戦士長は一体どんな人なんだ？

「アクセル戦士長、入ります」

「おお、マサキようやく来たか、待ちくたびれたぞ」

「すいません、少しレノアス閣下と話をしていたもので」

「そうかそうか、でここに呼んだ理由と言うのはだな、ほれ、俺が使っている武具一式だ」

「重っ…くない？なぜです？」

「当たり前だ、お前は優秀とはいえ、まだまだ未熟だろうから特別にクルスに頼んで軽くしてもらった」

「そうですか、ありがとうございます」

「大事に使ってくれよなっ」

「はい、頑張ります」



「では、早速行ってこい」

三人・『了解!!』

「はあ、早速死の宣告か…つらいねえ、でもこのアクセサリは絶対に生きてクルスさんに返さないとな。そのためにも絶対に生きてやる。」

「さて、他の隊はもう出発してるみたいだし、僕たちも行くか」

「新しい衣装に身を包んだマサキはさっきよりも頼もしく見えた、ちっこい戦士長みたいだ。」

「あれ？シャノンは着替えないの？」

「ああ、ちよつと待っててくれ、そこの影で着てくる」

「そういつた俺は、影に身を隠し、着ていた黒いローブを脱いで、クルスさんに貰った白とライトブルーが基調のローブと、アクセサリを付けた、絶対シオンに何か言われるだろうな…さて、着替えたし、戻るか。」

「お、おかえり…」

「笑いこらえながら言うの止めてもらえませんかねえ」

「だって、お前にそんな色は…フフツ」

「ついには笑い出したよコイツっ！」

「まあまあ」

「マサキ、笑いながらいうな、全然気が静まらん、さ、さっさと行くぞー」

「はいはい」

「こつちやって俺たちはようやく調査に出かけることになったよ…この調子だとシリアスなことは全然ないだろうな…ま、楽しかったら良いんだけどね。」

「お、おい俺を抜かして先々進んでんじゃねえ！」

「3年前と俺の扱いは全く変わってなかった。」

「こいつらだけは守らねえとな…」

## 第一話（後書き）

只今、第2話を執筆中です。  
頑張って書くのでよろしくお願ひします^^

## 第二話

「ここから先が調査対象だ、俺たちはここから旧ミッドウェー諸島付近まで行かなきゃならん」

「面倒臭いけど行かなきゃいけないのね…」

「何か出てきたら僕に任せてね、ある程度なら大丈夫だから」

「そうは言ってもこれだけ周りに何も無いような砂漠じゃ急に襲われることはないだろう」

「シャノン、その油断が命取りなんだよ？僕なんかそれで死にかけてたんだから…今思い出しても恐ろしい」

「その話聞かせてー」

「シオンは鬼だな、まあ俺も聞いてみたいが…」

「じゃ、話すね、あれはギルドの掃討任務で鳥取砂丘に行っていたんだ、それで対象モンスターを倒し終えたかなと思ったら、急に砂の中から大型のモンスターが出てきたんだ、その時僕は、出てきた影響で足元の砂が崩れてどんどん巣の中に引きずられていって、体の首辺りまで埋まった時、ギリギリで教官が来て助かったんだけど、もうちょっと遅かったら僕は死んでたかもしれない…だからここから先も何が出てくるか分からないから気をつけてね、特に砂の中」

「へえーそんなことが…とにかく気は抜かずに慎重に進もうね」

「ああ、そうだな」

俺もさすがにこんなところでつかい虫に食われるのはゴメンだ、ここは一つゆっくり行くとするか…

「それにしても何も無いもんだな…生き物の一匹ぐらいいても良いんだが…」

「出てこないに越した事は無いよ、シャノン」

「そうだよ？シャノンは戦う方法無いんだから」

「マサキ、そいつは間違いだ、魔道師は戦士より戦闘能力は高

い

「でも戦ってる所は見たことないんだけど」

「それはな、魔道十二条で禁じられているからだ、だが今回の調査ではこれは無視してもいい許可をもらったからバンバン戦えるぞ」

「へえ、そうなんだ」

「ところでちょっと気になってたんだけど、魔道十二条って何なの？」

「それはな、魔道師になる限りは絶対に守らなきゃいけない法律なんだ、もし破ってしまった場合は……」

「場合は？」

「最悪の場合、この世界から消される」

「!？」

「もし、逃げ延びたとしても、そいつは魔道師免許を剥奪され、永遠に追いかけてまわされることになる」

「魔道師って怖いんだね」

「ああ、力の弱い強いがあるからな、でもやたらに勝負はしない、魔道十二条で定められているし、戦うことになっても逃げるだろうな」

「なんで逃げるの？」

「魔道師は、戦士と違って戦いの勝ち負けがすぐに分かるんだ、魔力でね。だから、絶対に負けると分かった勝負は挑まないし、逃げたものを追わない。それが魔道師達の暗黙の了解」

「知れば知るほど魔道師が怖くなってきたよ……これ以上は聞かないことにする」

「それが良いだろうよ。ところでシオン、錬金術師って何するんだ？ただ金を作るだけじゃないだろ」

「当たり前じゃない、シャノンの中の錬金術はいつの時代で止まってるのよ」

「錬金術の発祥辺りからかな？」

「一から説明していけってことね」

「その通り、さて、よろしく頼む」

「仕方がないわね…この私が直々にバカシャノンに錬金術は何かを教えてあげる」

「有り難き幸せ」

「う、畏まりすぎ、錬金術の起源は古代エジプト時代まで遡ると言われているわ、現にその時代に書かれた錬金術のレシピが出てきたからね」

「でも、そんな前からあったんならそんな昔のやつなんて見なくたっていいんじゃないか？」

「話まだ終わってないわよ、だからバカなのよ…。で、その錬金術も次第に衰退の道を辿って、一時は今はあり得ないとされる科学が発達したの、でもそんなのも、戦争によって科学者と呼ばれた者は皆死んでいったのよ」

「で、錬金術が復活するわけか」

「間違っでは無いけど、その前にあなた達魔道師が登場するの」

「魔道師の方が後だったんだな…」

「その魔道師達は、古代人が遺していった古代書を発見して、実行、それによって得た道具を魔術の補助道具として使用していたの、あなたも錬金術少しくらいなら出来るでしょ？」

「全く出来ん、錬金術の授業はあったが全部寝てた」

「よくそんなのでトップで卒業できたわね…」

「まあ、それほどでもないけどな」

「褒めて無いわよ。で、話を戻すけど、その魔道師達も二つに分かれたの、一つは今まで通り、道具に頼って魔法を使う魔道師と今のあんたらと同じ、自分の力に頼って魔法を使う者たちにな…」

「で、道具を使って魔法を使っていった方は錬金術師になっただけで、魔法を使わないで魔法を使っていた方は錬金術師になっただけで、魔法を使わないで魔法を使っていた方は錬金術師になっただけで…」

「その通り、で、さっき貰ったのがさっきの話にも出てきた古代書」

「ちよつと見せてくれ」

「いいよー」

タイトルは…掠れて読めないな…だが中身は…と言うと 凄  
かった、これがあれば恐らく上級魔道師くらいの力は出せるかもし  
れない…シオンは作れるのかな？

「なあ、シオン」

「ん？なに？」

「この八卦炉ってお前でも作れるか？」

「見せてー…これくらいなら今持つてるのでも作れるか っ

てあんたこの文字読めたの？」

「ああ、ナトリ語だろ？さつき横から見たときはちゃんと読め  
なかったが、正面から見たらしつかり読めたぞ」

「あんたやっぱり凄いかもね…」

「お前らにはかないそうにもないけどな」

「むしろあなたに負けたら最大の屈辱だよ」

「俺は今あなたに最大の屈辱を受けたけどな」

「ねえ、二人とも…もうちよつとギャグ要素なくせないの？」

二人『無くせるわけないじゃない』

「まあ、そこが僕たちの楽しいところなんだけどね」

「楽しいんだからいいじゃないか」

「そうよ、どうせいつ死ぬかも分からないんだから、今を楽し

みましょ」

「そうだね…ってあれ？」

「うん？マサキどうかしたか？」

「ああ、あれを見て」

「あれは森ね…」

「森だと！？どうしてこんな砂漠の中に森が？」

「原因は分からないけど、多分この土地そのものが何らかの異  
常をきたしているからこんなことが起きてるんじゃないかしら」

「たぶんそんな感じだろうね」

「とりあえず、今日はあの森の手前でキャンプにするか…」

「それが良いね、でも火とかはどうするの？」

「マサキ、俺を誰だと思ってる？」

「あ、そっか」

「火つけなら任せておけ」

「さすが魔道師、頼りになるね」

「だろ？後は木だけだな…」

「目の前の森から掻つ攫ってきたら？」

「その手があったか」

「じゃ、今日はここでキャンプな」

「了解」

「じゃ、僕は木の枝を見繕ってくるよ」

「おう、任せた」

「じゃ、私はさっき頼まれたものを作ってみるね」

「ありがとう」

さて俺は一旦結界でも張って安全な状態にしておくか…

「採ってきたよ」

「じゃ、そこに集めてくれ」

「はいはい」

「危ないから離れてるよ」

俺は右手を開き少し集中し、右手に力を入れるとボンツと音がして、勢いよく炎が飛びだし、束ねた木の枝に火がついた。これくらいは簡単簡単。

「うわーこつやってみるとあんたも魔道師なんだね」

「いつもより威力が強かったみたいだ…このアクセサリのおかげかな？」

「それあるだけで違うものなの？」

「ああ、もし同じ魔力同士の奴が出会ったら最後に決着をつけるのは装備品が持つ魔力だからな…俺のはクルスさんに貰ったものだから相当な魔力はあるぞ」

「じゃ、これからは火付け役はシャノンに任せるね」  
「任せとけ」

「はい、二人とも」

「これは？」

「食べ物だよ」

「これがか？」

「錬金術師シオン様特製の飴だよ、これ一粒で必要なものは全部摂れるから、今日みたいに食料があまりなかった時は重宝してるんだよ」

「錬金術師って便利だな」

「まあね」

「ところで、精製の方はうまくいきそうか？」

「あともうちよつと掛かるかな、出来たら呼ぶね」

「ああ、わかった」

さて、マサキは…剣の手入れしてるな、ちよつと心話でからかってやるか。そのためにはシオンに協力してもらおうか…

「シオン、ちよつと俺と喋ってるフリをしてもらっていいか？」

「いいけど、なんで？」

「心話でちよつとマサキの奴をからかってやるのかなと思ってさ」

「なるほど…じゃ始めるよ」

「よろしく頼むよ」

そういつて、俺は少し集中しマサキに心話を送ってみた。

「マサキーおーい」

「????？」

マサキの奴予想通りの反応だ…戦士じゃこつという経験はすくないからなあ。うん？シオンの奴もマサキの反応に気付いたな、笑いを堪えてやがる。

「シオン、頑張れ、笑いを堪えろ」

「だ、だってあんなにキョロキョロ…」



「それでも笑っちゃダメだぞ、もう一回話しかけるから  
今度は何を話そうかな…」

「マサキ、右だ右！」

「っ？」

「今度は左だ！」

「なっ？」

「あああ、今度は上だよ！」

「何も無いよ〜」

「あれ？じゃお前の後ろの奴は誰だ？」

「うわっ！ってシャノンか…でも喋って無かったよね？」

「喋ってはいたぞ、もう一回話すからよく聞いとけ」

いつも通り、目を瞑って、念を入れて心話の術…。…何やってんだ俺？そんなことより話しかけるか…

「マサキー聞こえるか？」

「うわ！口動かしてないのにシャノンの声が」

「今のが心話だ、俺が心話で話しかけた時は気を集中させて、喋りたいことを念に込めれば、俺に伝わるから。じゃ、一回やってみるよ」

「うん、分かった」

「マサキー返事してみろー」

「こ、こっ…かな？」

「ああ、そんな感じだ、とりあえず普通に喋るか」

「で、これは僕からは喋れないの？」

「出来んことはないが、出来たとしても口で喋れる範囲位にか届かん」

「あんまり役に立たないね…」

「魔道師じゃないからな、俺は一応ここからなら、そうだな…  
フランス辺りまで届くかな？」

「凄いな！！じゃあさ、報告する時も心話で話せば楽だね」

「そうだけど、報告なんて長いのをそんな遠い所に心話したら

俺がぶっ倒れるぞ、それに、遠すぎると心話より、遠話の方が楽だな

「遠話って何？」

「遠話ってのは、心話よりより遠くに話す時に使うんだ、それで、遠話のメリットは、長い要件を伝える時に疲れなくて済むのと、相手の意識下に入り込んで話すから、相手が寝てるときでも話せるんだ、でも心話とは違って相手に念が届くのがちょっと遅いしんだ」「なるほどね…今ちょっと僕に遠話出来る？」

「できるぞ、ちよつと待ってる今念を送るから」  
遠話は心話と違って、ちよつと長く集中しないとイケないからな…あんまりやりたくないがマサキの頼みだからな…よし、集中するか。

……………

「マサキー聞こえてるか？」

「聞こえてるよ、さつきよりなんか声が透き通ってる？」

「これだけ近い距離で遠話だからな、念の通りが強いよ。ところで、ちよつと目を瞑ってみ」

「うわ！シャノンの姿が頭？いや目の前？に浮かんできた！」

「これが遠話のもう一つの面白い所だ、相手が目を瞑っているときに限って相手に自分の姿を映し出せるんだ」

「へえ〜楽しいね」

「でも、あんまり使わないけどな」

「だろっね…」

「じゃ、普通に喋るぞ？」

「ちよつとさつきから二人で楽しそうな雰囲気作ってるのよ」

「おっと、悪い、マサキをからかうのが楽しくてな…」

「それなら仕方無いわね、それはそうと出来上がったわよ、頼まれた物」

「お、出来たかちよつと見せてくれ」

「はい、どうぞ」

「結構小さいんだな…手の平サイズとは使いやすい」

「なあ、何？それ」

「これは八卦炉といって、昔の魔道師が使ってた物なんだが、この中にいるんな物を入れて、それに含まれている魔力を、エネルギーとして放出するんだ」

「つまり、八卦炉＋シャノンの魔力でより強力なパワーが出るってこと？」

「そんな感じだ、攻撃とかにしか使えないが、それだけでも十分だ」

「試しに使ってみてよ、ここにさつきとってきた鉱石みたいなものがあるから」

「お前…何拾ってるんだよ…まあいいがちよつとどいてるよ」

「マサキーこつちこつち」

「うん、その辺りでいいぞ」

「で、何に向けて撃つの？」

「あそこのでつかい岩だ」

「あ、さつき掘ってきた場所だ、結構堅かったよ？」

「まあ、大丈夫だろ。いくぞ」

さて、とりあえず八卦炉に物入れてと…これは…ルビーの原石か、あの岩って寶石の原石が埋まってるのか…なるべく消し飛ばしたくないが…消しちゃうか。

あとは、入れるほうを向こうに向けて…お！？魔法陣が出てきたぞ、これは期待できそうだな、そろそろ撃つか。1、2の3！！ドオオオオン！！

うわ！なんだ今の…岩が跡形も無く消し飛びやがった…よく見りゃ砂漠の方が削れてやがる…えげつないな。

「しゃ、シャノン今のは…？」

「凄かったよ今の、岩消えたもん」

「何が起きたかあんまり覚えてないんだ…何せ目の前が光に包まれたからな…」

「簡単に説明するとね、その八卦炉から太い光が岩めがけて一直線に伸びていってそのまま今の状況よ…これが古代の力ね」

「なるほどな、これは使いどころ間違えたら大変なことになるな」

「僕たちを巻き込まないでよ」

「巻き込まれたら耐えれそうに無いわね…」

「いざという時にしか使わないから大丈夫だよ」

「まあシャノンがそんなことする筈ないから安心できるね」

「そうだね」

「じゃ、二人ともそろそろ寝ないと、明日もまだ続きがあるんだから大変だよ？」

「シャノンは寝ないの？」

「ああ、何かが襲ってこないように結界を張っておかないといけないしな」

「結界って何？」

「マサキ…戦士学校では魔道師について習ってなかったのか…大変だな」

「まあね、戦士学校では魔道師に関することなんて一切習わなかったからね、ここでシャノンに学ぶとするよ」

「じゃ、説明するぞ、結界っていうのはな、その名の通り、その中に入って来れないようにするんだ、いや、言い方が変だな…入って来れないと言うか、入る気が無くなるんだ」

「何言ってるかさっぱり分からないよ」

「うーんどうやって説明しようか、例えばAとBが大切な話をしたい、でも誰にも聞かれたくないし、入ってきてほしくもない。そういう時に結界を張ると、結界の強さにもよるけどその中にはA、Bしか居ようと思わないんだ、つまり、Cは行こうと思っていても、その途中でいろいろあつたりして結局結界を張っている限り入って来れないんだ。その用事とかにもよるけどね」

「なるほどね、じゃ、シャノンが張ってる限りは何も入ってこ

ないんだね」

「ああ、安心していいぞ」

「でもさ、それじゃシャノンが寝たら結界は解けるの？」

「そうだけど、魔道師は3日ぐらい不眠不休でも大丈夫なんだ」

「なら、いいけど、シャノンも一応寝ていいよ」

「なんでだ？」

「僕これでも戦士だよ？敵の気配位近づいてきたらすぐに起きれるように訓練されたからね」

「頼りになるねえ、で、シオンは」

「……スウ……」

「寝てるね……」

「だな、寝顔可愛いな……」

「いたずらしちゃう？」

「うーんやめとく、後が怖そうだ」

「そうだね……せめて何か掛ける物無い？」

「ほれ、毛布を出してみた」

「シャノンの魔法はホントに便利だね」

「だろ、なんでも出せるぞ」

「じゃあさ、お金出してみてよ」

「お前なあ……ほれ、出してやったぞ」

「凄い！！貳千円だ、やったね儲けた」

「いや、プラスゼロだぞ？」

「え？つて、あ！！僕の財布から貳千円消えてる」

「欲をかくからお前の所から貳千円を出してみた」

「酷いね……」

「当然の結果だよ」

「反省しています」

「よろしい」

「さて、シオンもぐっすり眠ってることだし、とその前に、布団は出せないの？」

「そうだったな、じゃ出すぞ」

「痛っ」

「あ、すまん、まさかお前の上に出るとは…」

「気を付けてよ、じゃシオン持ち上げて」

「こういうのはお前の仕事だと思っがな…ほら、早く敷けよ」

「はい、敷けたよ」

「ほいっと、じゃ、お前も寝ていいぞー」

「じゃ、先に寝させてもらいうよ、お休みー」

「おう、お休みー」

さて、俺も境界を張るか…何するかな…さすがに寝顔観察は只の変態だしなー

マサキの子供っぽい顔してるな…何にも変わっちゃいないけど、こいつはいままでのこいつとは違って、中身はだいぶ変わったな…

シオンは全体的に大人っぽくなったな…3年前は子供みたいな所もあつたけど…今ではほとんど見せないな…こいつも苦労したんだな…

「それに比べて俺は何をしてきた？」

この3年間で何を学んだんだ？ただ魔術を勉強しただけ…対人関係も全部捨てて…

そこまでしてでも一番で卒業したかったのか？一番になって何になるんだ？

俺は単に外からみたらシオンやマサキに追いついたかもしれん…けど…けど肝心な中身は3年前から何にも変わっちゃいない！

はっ！俺としたことがつい声に…起きてないよな…

「シャノン…」

「シオン…もしかして聞いていた？」

「その、ゴメン…」

「いや、いいんだ、俺のミスでもあるからな」

「あんたも結構悩んでるのね…」

「ああ、結構な…正直いろいろ辛い」

「別に私たちに隠す必要なんてないよ？ 私たちの仲じゃない」  
「そうだな…これからはお前らにも相談してみるよ…その代わりと言つては何だが、お前らの相談にも乗ってやるよ、こんな俺に聞いたつて意味はないかもしれないけどな…」  
「人間はね、人に自分の事をぶつけるだけでも大分すつきりするものなんだよ？」

「うん、分かった」

「こうやって考えるとシャノンも変わったよ？」

「口調がきつくなってるもん」

「そ、そうか？」

「そうよ、3年前はもっと優しい喋り方だったよ？」

「そうだっけ？」

「うん、そんな感じかな？」

「知らない間に変わつてたか…時間とは残酷な物だな…」

「ほら！また戻ってる…その口調ちょっと怖いよ？」

「あ、ああまた戻ってた？」

「完全に変わつちやってるね…ちょっとづつでいいからまた元の口調に戻してね？」

「頑張ってみるよ」

「その調子だよ」

「持つべきものは友だね…」

「当たり前じゃない！この3人が集まったのも何かの縁なんだから頑張つて生き抜こうね」

「当たり前だよ、シオンもマサキも俺が守ってやる…何が何でも…」

「任せるよ…あんたが3年前みたいに戻ってからね」

「早く戻らないかな」

「あんたの努力しだいでしょうよ」

「努力ならもう十分したよ…」

「あんなので堪えてたら体持たないよ？」

「だねー、大分戻ってきたかな？」

「まあ、そんな「感じ」でしょ」

「これからもよろしくね」

「こちらこそよろしくね」

「そろそろ寝るか？」

「うん、そうするよ、シャノンは？」

「俺はもうちょっと結界張っとく事にするよ」

「そうか、じゃ、寝るときこれ使ってね」

「これは？」

「錬金術でつくったあんたの魔道を詰め込んでみた、使えるのは一回だけだけどね」

「じゃ、俺の結界の代わりにでも使わせてもらおうよ、ありがとう  
な」

「いいよ、いいよ、また何かあったら作るからいつでもいいって  
ねー」

「おう、わかったよ、じゃ、おやすみー」

「ふああ、眠たいよ…お休みー」

昔の俺…か変わってないようじゃ変わってたのか？

自分の変化は自分では気づけないってことか…

考えてたら眠たくなってきたな…一応大丈夫だけど、シオンか  
らもらったやつもあるし寝るとするか…

絶対に生きて帰ってやる…



## 第二話（後書き）

やっと完成！！w

高校生ですが頑張ってますw

もしよければ感想なども一言だけでもお願いしますm（）m（）m

### 第三話

「この森に入るのかよ……」

「なんか向こうの方真っ黒だよ？」

「いったい何があるんだろうね」

「なんでシオンはそんな楽しそうなんだよ……」

「だって森でしょ？私にとっちゃ材料の宝庫よ」

「なるほどねえ」

「あ、そういやシャノン、一晩で口調治るもんなんだね」

「結構そうみたいだよ」

「何の話？」

「昨日ねちよつとシャノンと話したのよ、口調についてね」

「確かにシャノンの口調は3年で大分怖くなってたよね……」

「マサキもそう思ってたのかよ」

「あまりにも変わりすぎてたからね……」

「言ってくればよかったのに……俺はシオンが言うまで全く気

付かなかったよ」

「なんか怖くて言えなかったんだよ」

「うーん、二人にはちよつと迷惑掛けたな……すまん」

「いいよ別に、もう大丈夫なんだし」

「まあ、いつまでもグダグダ言ってたって仕方がないからね」

「そうだな……じゃ、気を取り直して先に進むか！」

二人・『おー』

とりあえずドンドン進んでみるか……にしても暗いな……でも外から見た感じより明るいかな？それでも暗いことに変わりはないんだけどな。

それにしても全く不思議なものだな……こんな砂漠のど真ん中にいきなり森なんだからな……何が起きても

……  
アアア！

三人・『!?!』

「今確かに何か聞こえたよね？」

「ああ、どこから分かるか？」

「シオン、シャノンこっちだよ!!！」

「それにしてもこんなところに人なんて…まさか俺たちと同じ調査隊の奴らか！」

「なら急がないとね」

「そうだね　ってあれは！」

「う…う…う」

「おい、どうした！何があつたんだ？」

「き、急に横から黒い大きな影が…」

「他の奴らは!?!」

「分からない…俺がやられた後、先の方に行つたからあつちの方に居てる筈だ……」

「おい！大丈夫か？」

「大丈夫よシャノン、急所は外れてるからまだ治療は出来るわ」

「そうか、なら俺に任せろ」

まさか使うことになるとはな…念のために治療魔法覚えていて良かったよ…

「すごい！傷が治っていく」

「でも、この人動かなくなつたよ？」

「大丈夫、気絶してるだけだから。この魔法使うときは対象者の精神にも影響するから、気絶する時があるんだ」

「なら、この人は助かつたのね」

「ああ、あとは気絶したこいつをどうするかだな…まだ逃げるやつがいるみたいだからな」

「じゃ、マサキー担いで」

「分かつた、よいしょっと…あれ？重く…ない？」

「重力操作の魔法だよ、長い間は出来ないから早く行くぞ」

「この足跡を辿って行くっか」

キヤアアア!!

「近くだな!急ぐぞ」

「ええ!」

間に合うか…頼む間に合ってくれ!

「あ、あそこ!」

「何?あれ!」

「あ、あなたたちは!?!」

「君達、安心していいよシリアスな場面もギャグにしちゃう三人組の登場だよ」

「これは…でつかいオオカミ?」

「グルルル…」

「怒ってらっしゃるようですが?どうします?マサキ君?」

「シオンに任せるよー」

「じゃ、私はシャノンに任せるー」

「マサキー昨日の石余ってる?」

「あるよー」

「じゃ、シャノンの準備ができるまでこいつにはこの匂いを嗅いでもらいますか」

「シオン、それは?」

「これはね、マヌバの葉とね、イタルの花を乾燥させた奴で、燃やした時の煙には麻痺成分がたっぷり入ってるの」

「おい、その匂い人間には効くのか?さっきから体がしびれてるんだが…」

「あ、ごめん、これ飲んで」

「散々だよ…おかげで肩こったよ…晩に肩揉みしてもらっからな!」

「はいはい、ささつと殺っちゃって」

「シオン!?今字が怖かったよ…」

「あの…このやり取ってどのぐらいの早さで…」

「1、2の3どーん」

「キヤアアア！」

「ゴメンびっくりした？でも、ほら、見てみなよ」

「居なくなってる…と言うか森が半分無くなってる…」

「ちよつとやりすぎじゃない？」

「まだ出力調整がうまくいかなかった…」

「で、君たちは誰なの？」

「私たちはレノアス閣下に調査を頼まれた者です」

「なら私たちも一緒ね」

「あなた方もでしたか」

「君たちはどこまで調査するの？」

「私たちは距離的にこの森を抜けたところ辺りです」

「ならそこまで俺たちと一緒にいかないか？」

「いいんですか？助かります…えーっとお名前は？」

「ああ、俺はシャノンで、これがシオン」

「私物扱いされた！？」

「あーうるさい。それで、これがマサキ」

「僕も物なの…？」

「シャノンさんありがとうございます」

「君の名前は？」

「私はチイです」

（ねえマサキ。私たちなんだが無視されてない？）

（僕もそう思うよ…でもだーれも構おうとしてくれないよね）

「二人ともそんなこと言ってないでこっち来いよ」

『聞こえてた！？』

「魔道師をナメちゃいかんよ」

「すいません。見くびってました」

「わかればよろしい」

「シャノンさんは魔道師ですか…」

「そだよ、服装も魔道師らしいから気付くと思っただけ…」

「いや、そうじゃなくて、知り合いに魔道師学校に行った子が」

いて…」

「その子の名前は？」

「マリオンです」

「マリオンか…確か同じクラスだったな。唯一俺と仲良かった奴だな」

「シャノンに話しかけるなんて物好きな子ね」

「お前が言うなよ、でその子がどうかしたのか？」

「いえ、元気にやってるか気になったもので…」

「あいつなら3年間元気にしてたぞ」

「なら良かったです、あの子あんまり周りと馴染めませんでしたから」

「確かに…だから俺と気が合ったのかもな」

「でも、元気だと分かって良かったです」

「じゃ、そろそろ行こっか」

「ですね」

「で、シャノン。僕はいつまでこの人を担げばいいの？」

「ああ！？セーメイド。助けて下さったのですね、ありがとうございます」

「おいー起きろー!!」

シオンよ。そんなにペシペシ叩いたらそいつが持たないぞ…

「楽しそうだなー僕もやるっつと」

「あ、おい」

あーマサキも参加しちゃったよ…

(ごめんね、チイちゃん。大事な戦力をあんなにして…)

(はい…彼なら大丈夫でしょう…ねえ？レイラ？)

(レイラ？)

(そこの影に…あれ？いない)

(ねえ…もしかしてあの子？)

「私もやるーこいついじめるの楽しーもん」

(はい…あの子がなかなか困った子で…なんというか、DSな

んです)

(発言からしてそうだろうね…)

(セーメイが居なかつたら私が…)

(考えただけで怖いんだね)

(その通りです)

(というか、セーメイもなかなか起きないな…)

(死んでるのでは?)

「ねえ、なんか頭から赤いの出てるよー」

(今、限りなく不吉な言葉が…)

(助けてあげましょうよー!!そうじゃないと私の身代わりが…)

(君も結構酷いよ!?)

(いいから早く!)

「おい!そろそろやめてやれ。ああ、もう瀕死寸前だよ…」

「やりすぎちゃったね…」

「ところで君は?」

「私?レイラだよ」

「よろしくね、レイラちゃん」

「君…虐めがいがありそうね…」

「ええ!?僕…」

「だめよ、マサキは私のモノなんだからっ」

「とりあつてもらつてもちつとも嬉しくないよ!」

「おい、目を覚ましたぞ」

「ううん…なんか全身が痛い…」

「それはあんたがをこいつ　ぐはっ!」

ちよつと待て…今のは?何故背後から鳩尾を殴れるんだよ…さ

すがドSか…

「さ、さつきモンスターにやられたからじゃない?」

「あのーさつきの方がピクリともしてないぞ…」

「やりすぎちゃった」

「そ、その　はなんだよ…」

「結構しぶといわね…もう回復したの？」

「あれくらいでやられてたまるか！ほら、さっさと行くぞ。いつまでもこいつらと一緒にいたら身体がもたん」

「もう先の方が見えてるわよ？」

「結構短いんだなこの森！？」

「僕たちが走ったからじゃない？」

「ああ、それもあるな…結局あれはなんだったんだ？」

「見たところニホンオオカミがでかくなつた感じかな？」

「それって絶滅したんじゃない？」

「まあ、多分それもこの地域一帯が原因だろうけど…」

「そうだろうな…と、言ってる間にもう外に出てきたよ…」

「結構早いねー」

「私たちはこの辺りの簡単な地図書いて帰らせてもらいます。

何から何までお世話になりました」

「いやいや、当然のことをしたただけだから」

「無事に帰ってね」

「あ、そうだ、帰りはこれをもっとくと良いよ」

「これは？」

「匂い袋だよ、あれがオオカミならこれが嫌いなはずだから」

「分かりました、ではこの辺で」

「じゃーねー」

短い間とはいえ、なかなか濃い時間だったよ…というかまだ痛いよ…寝たら治るかな？

「嵐のような人たちだったねー」

「お前に似合ってるよ」

「お、それは失言だねー」

「そうかな？」

「また、何か探ってくるねー」

「遠回しに逃げた！？」

「さて、今日こそ覚悟してもらいましょうか…」



「わぁーごめんなさいゴメンナサイ」  
「…仕方がないなあ、許してあげよう」  
「上から目線がムカツクがここで反論したら」  
「どうなるか分かるよね？」  
「分かっています」  
「ならよろしい」  
「許していただき光栄です」  
「よろしい」  
「もう、やめよう!!」  
「だね…でもまだまだ続けたよ？」  
「確かにな…」  
「おーい、魚採れたよ」  
「ここですか!？」  
「近くに湖があつたんだ」  
「じゃ、今日の晩御飯はこれだな…」  
「シャノー火い頼むよ」  
「任せとけー」  
「おおーもう点いた」  
「早っ!」  
「えっへん」  
「威張ることじゃないと思うよ…」  
「早く焼こーぜ」  
「そだね」  
「結局今日は森抜けて終わりだったね、なかなか疲れたよ」  
「メンバーが濃かったからな…」  
「だよねー」  
「魚焼けたよー」  
「相変わらず早いな」  
「小骨多いねー」  
「食べるのも早え!」

「ごちそうさまでした」  
「マサキ。お前何者？」  
「只の人間だよ？もーらい」  
「ああ！？俺の魚！」  
「おいしー」  
「俺の晩飯が…」  
「はい、お馴染みのシオン特製の飴だよ」  
「味気ない…」  
「文句言わないの！」  
「はいはい」  
「おやすみー」  
「マサキだけ別の世界に行つてないか？」  
「私も寝よつと」  
「食べてすぐ寝たら太る なっ！」  
「静かになつたわ…おやすみー」  
また殴られた…今日は厄日だな…このまま寝ちゃうか…なんだ  
か俺がいなくてもこいつら生き残るんじゃないか？  
「二人ともおやすみ」

### 第三話（後書き）

やっと書き終わりました^^

高校が忙しいです^^;

読んでいただいている方には感謝してます>>

## 第四話

「森の次は洞窟か…」

「訓練とかでありがちな展開だね」

「だよ。って言うか向こうの方向か明るくない？」

「ホントだな…もしかして、この洞窟短いんじゃないか？」

「ならサクッと抜けちゃいましょう」

「そうだな」

「でも、なんかあの光が怪しいような気が…」

「でも、何が出てきてもシャノンが八卦炉で消してくれるよ」

「あー…悪い。エネルギー源のあの鉱石無くなった」

「ええー！？何やってんの！これだからシャノンは…」

「僕、結構な量採ってきたよ？それを二回で使い切るなんて…」

昔からシャノンは無駄遣いするよねー」

「ムムム…あってるが故に反論できないとは…くやしいのう」

「お爺ちゃんほっといていきましよう、マサキ」

「そうだね」

「ち、ちよつと待ってくれー」

……うわああー！！

マサキの声！？まさか…

「マサキー！！」

この先で…居ない？…！？この穴か…

「マサキーシオンー？」

「シャノン？」

「その声はシオンか！？」

「ええ、まさかこんな所に穴があるなんて…」

「とりあえずマサキは無事か？」

「僕なら大丈夫だよ…痛てて」

「どこか打ったのか？」

「うーん、足がちよつとやられたね」

「そうか…じゃ、いったんこれ落とすから」

とりあえずこの痛み止めで…どれくらいの高さかな？

……………カラン

「高っ！」

「そんなに高い？」

「10秒は自由落下してたぞ？」

「なんで僕たち生きてるんだろ？」

「運が良かったのよ」

「そうだね」

「納得して良いのかよ!？」

「早くこつち来なさいよー」

「高さが分かってて落ちる奴がどこにいるんだ？」

「じゃ、どうするのよ…？」

「とりあえず、お前らも先に進んでいてくれ、俺も先に進むか

ら

「分かったわ、じゃ、また後でね」

「ああ、死ぬなよ…あと、マサキ。それ「痛み止めだから飲んで

おけ

「わかった。シャノンこそ死なないでね」

「俺が死ぬわけないだろ。じゃあな」

さて…どうやって合流するかな、この先は穴で進めなさそうだしな。

お!？なんか通れそうな脇道が…よいしょつと、おお!穴の向こうにでたぞ…なんと都合のいいこと。

それにしてもあいつらが居ないとなかなか寂しいもんだな…何というか…何と言っただろうな。

それにしても暗いな…火でもつけるか…枝、枝つと、あったあつた。よし、明るくなったな　うわっ…蝙蝠か。多少大きかったが…気にしないでおこつ。

……鼻がムズムズするな…誰か俺の噂でもしてるのか？  
うん？拓けた場所に出たな…

「一人でこの場所に踏み入れるとは…さすが愚かな地球人、  
でも言おうか」

「貴様は何者だ？」

「我か？我らはこの地球を支配するために宇宙からやってきた  
軍団だ」

「なんかぎこちない自己紹介だな」

「貴様らにはこの素晴らしさは理解できないようだな」

「なんかめんどくせえなお前」

「言わせておけば！ハッ！」

「おっと…そんな攻撃じゃ俺には当たらないぜ」

「調子に乗るなよ…これならどうだ！！」

さつきと同じ！？いや…違う！後ろからもか！？危ねえな…

「ちよつとはやるようだねえ」

「お前は戦う気があるのか？」

「俺か？俺は既に戦闘モードだぜ？次は俺から行くぜ」

「何もしてないじゃ　うぐっ…何だこれは…頭が…割れる…」

「割りやしないさ…ただ、いろいろと聞き出すだけだから」

「ふん、そんな武力脅迫などに屈しはせんっ」

「抵抗するんだ…魔道師に抵抗は無駄って知ってるのに？」

「そんなもの…舌を噛み切つてしまえば　なっ…なぜ出来な  
いんだ…」

「だから抵抗しても無駄だつて言ってるでしょうが…ちなみに  
舌を噛み切つても無駄だよ。記憶の中を見させてもらうから」

「姑息な手を…こんな魔法などっ」

「あーあ、折角おとなしくしてれば、何もせずに助けてやった  
のに…動いた罰ゲームだよ…」

「ぐあああああああああああああああ………」

「命は助けてあげたから感謝するんだな…精神の方は悪いけど

壊させてもらったよ。さて、記憶でも見るか…」

最初に言ってたの同じだな…そういえば我々って言ってたな…  
調べてみるか…

なるほど…『ペルソナ』か…そのくせに仮面付けてないな…そんなベタなのは嫌かのう…

おっと…あいつらと早く合流しないと…

シャノンがそんなことをしてた時…

「シオン。もう大丈夫だよ」

「ホント？シャノンの薬が効いたのかな？」

「そうみたいだね。じゃ、いこっか」

「それにしてもここははじめじめしてて嫌ねえ」

「そうだね…シャノンは大丈夫かな…」

「大丈夫でしょ、あのバカは」

「…あれ？今くしゃみ聞こえた？」

「気のせいでしょ、ほら行くわよ」

「ああ、うん」

「シャノンがそんなに心配？」

「まあね、やっぱり僕の中のシャノンは中学時代で止まってるから…」

「でも、あいつも頑張ってるんだし、気にしなくても大丈夫でしょう、何回か助けられてるんだし」

「言われてみればそうだよ…結構頑張ってたんだよね…」

「だからあいつは大丈夫だよ」

「うん？…シオン！伏せて！！」

ヒュン！

「何！？」

「シオン、大丈夫？これは…矢！？」

「とりあえずここは危険ね…一旦身をひそめましょうか」

「その方がよさそうだね…とりあえずあの岩伝いに先に進もう」  
「わかったわ」

「ただど一体誰が弓矢なんてものを…僕たちにここに居るとい  
ことは…まさかあいつら？」

「シオン、もしかしたら此処にはあいつらが居るのかも知れな  
いよ…」

「あいつらつてもしかして空から降ってきた人たち？」

「その通り、だから一層気を引き締めないとダメだよ」

「そうね…あれ？ねえ、あれって人？」

「うーんそれっぽいね…どうする？敵かもしれないけど行く？」

「まあいくしかないでしょ」

「ですよね」

「遅かったな…二人とも…」

「シャノン！？大丈夫だったの？」

「当たり前だろ…死ぬわけないよ…」

「マサキ…このシャノン何か変じゃない？」

「そうだね、何だか覇気が無いというか…」

「覇気がないのはもとかからでしょ！」

「ほお〜俺が俺じゃない？これは変わったことを言うもんだな

あっ…シオンさんよ！…」

「シオン危ないっ！」

「キャッ、ありがとう、マサキ」

「やっぱりシオンの言うとおりちよつと変だね…じゃ、次は僕

からだね…このレイピアの錆にでもなってもらおうよ！…」

「…っ、なかなかやるじゃん」

「肩腕おとされてるのにピンピンしてる！？」

「マサキ！そごどいてて」

「わかった」

「シオン様特製手榴弾だよ」



「錬金術ってなんでもありなの？」

「うぐっ…身体が動かない…」

「今回はユラシナの麻痺種をふんだんに使用しました。マサキ、今の内よ、殺っちゃいなさい！」

「字が怖いよ…じゃ、遠慮なく！！」

「くっ、此処までか…」

「全く…シャノンを騙るなんてバカな真似をしたね、おかげで思いつきり切れたよ」

「それってどういうことなんだよ？」

「あ、シャノンやつと合流だね」

「ああ。それにしても俺になりすますなんざいい度胸してるね、敵さんも」

「ばればれだったけどね」

「まあ、ちよこつとだけ見てたんだけどな」

「どの辺から？」

「遅かったな、二人ともつとところから」

「最初からじゃん！なんで助けてくれなかったのさ？」

「できたらややこしいことになるだろ」

「確かに…僕だったら偽物ごと切っちゃいそうだったもん」

「出てこなくて正解だったよ…」

「そういえば、シャノンは何にもなかったの？」

「いたよ、黒い服着た人が」

「大丈夫だったの！？って聞いても、ここに居るんだから大丈夫

夫だったよね…」

「僕みたいに殺してきたの？」

「殺してはいないけど、精神の方を壊させてもらった」

「壊された人はどうなるの？」

「動くことも喋ることもできない廃人になる」

「それって要は死んでるのと一緒なんじゃ…」

「悪い言い方をすれば、な。ほら、そんなこと気にしてないで、

先に進むぞ、この先の坂を上がって行ったら出口だったから」

「そんなところまで来てたんだ」

「やっぱりこの洞窟短かったね」

「途中でトラブルがあっただけだな」

「とりあえず今日は外に出たらそのあたりで切り上げましょう

か」

「だな」

「洞窟の中じゃ、ちゃんとした時間が分からないから変な気分だよ」

「ほーら、グダグダ言っていないで行くぞ」

「はい」

まったく…そろ、そろ調査も面倒になってきたぞ…砂漠、森ときて洞窟はなんか適当さを感じるな…そういえば誰かに見られてるような気がするんだよな…気のせいかな？

「シャノンー。何で最初に歩き始めたのに一番後ろにいるのさ？」

「悪い悪い、ちょっと考え事してた」

「考え事…ねえ」

「うん？シオン何か言いたいのかな？」

「いやいや何にもないよ。ただ、考え事って何かな？って」

「ああ、そんなことかただ単に、展開がベタだなんて思ってただけだから」

「そんなことね…それって考え事なの？」

「一言で言えば、違う」

「だよ」

「ふう、やっと登り終わったよ…」

「まだ結構明るいわね…」

「また砂漠ってことには誰も突っ込まないのか？」

「出来ればその現実から目を背けたかったわ」

「何で言うかな…あれ？向こうに影ない？」

「ホントだな…ちょっと見てくるよ」

「結構遠いよ？」

「まあ見てなつて」

こんな時の遠移の術だよ、まああれぐらいなら10秒で着くだろ…ただ人前でやるとクルスさんみたいに…ま、いつか。

「うわ！シャノンが黒いドロドロに…」

「シオン…僕怖いよ」

「ただいま」

「うわ！もう戻ってきた」

「あつちにオアシスがあつたな…今日はそつちまでいこうぜ」

「それは分かったけど、今のはもしかして遠移？」

「その通り、読んで字の如し遠くに移動する便利な魔法だな」

「でも、便利なのは分かったけど、黒いドロドロになるのはど

うにかならないの？」

「悪い、それはどうにもならん」

「仕方ないね…それじゃ気を取り直していこっか」

「そだね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「誰か喋ろうよ！？結局一言も会話なかったまま着いちゃった

よ…」

「まあ、いいんじゃない？」

「まあね」

「なんか適当だなおい」

「気にしない気にしない、飴あげないよ？」

「またこれか……………」

「文句ある？」

「いえ、何にも」

「ならよろしい」

「明日こそちゃんと食べ物食べよう…」

「二人ともーそこに水あるから飲んできたら？」

「さっき見に来た時に飲んだから良いよ、それより、俺今日は魔法使いすぎたから先に寝るわ」

「そっか、身体に何かあったら大変だもんね、おやすみ」

「おやすみー」

そういつて俺は眠りについた

## 第四話（後書き）

多少無理やりで申し訳ないです><

## 第四話 A n ・ (前書き)

シャノンが寝た後の話です。

シャノンが少し苛められました ><

## 第四話 A n .

「シャノン寝ちゃったね」

「そうだね」

「どしたの。シオン？なんか浮かない顔して」

「いやあ、どうもあの洞窟で訳の分かんない奴と出会ってから、誰かに見られてるような気がするのよ…」

「そう？僕はそんなの全然感じないけどな…」

「気のせいかしらね…」

「多分、そうだと思うよ。で、今はそんな感じしてる？」

「今はしてないのよね…」

「とりあえずまたしたら僕に言ってね、ちょっと調べてみたいから」

「うん、わかったわ」

「視線か…気になるね」

「シャノンは何か感じてるのかな？」

「うーん、どうだろ？シャノンが感じてるんなら本当に見られてるのかも知れないしね…」

「明日辺りにでも聞いてみよっか」

「そんなこと言わずに、今聞く？」

「そうね、ちょっと痛い方法で起こしてくる」

「普通に起こしてあげようよ…」

「こめかみ…！」

「うっ…！！………」

「痛そ…あれ？」

「起きてこないね」

「おーい、シャノン？」

「起きろー」

「殴り方が足りなかったかな？」

「違ふと思つけど…」

「とりゃー！」

「……………」

「絶対に気絶してると思つよ」

「気のせい、気のせい…多分」

「念の為に、揺さぶってみよっか」

「とりあえず、そうして」

「シャノンー生きてる？」

「……………」

「うん、とりあえず寝てなさそうだよ」

「どうやったら元に戻るかな？」

「ほっといたら元に戻ると思つよ。息は死てるし」

「じゃ、そうしましょう。今日の所はこれで寝るとしよっか」

「そうだね、おやすみー」

「また明日ー」



#### 第四話 A n ・ (後書き)

この話は決して、時間稼ぎとかじゃないんですからね……  
ほ、ホントですからw

簡単に言えば、シャノン目線なんで、寝た後は分からないんで、マ  
サキ& a m p ・ シオン目線です。

## 第五話

「う、うん。朝か…いてっ」

「あ、シャノンおはよ。どうかしたの？」

「ああ、なんか全身が痛くてな…」

「え！？そ、そうなの？大丈夫？」

「一応、生きてるから大丈夫だろ。」

「おはよう、二人とも。どうしたのシャノン？」

「いやな、朝起きたら全身が痛いんだよ」

「ふーん。誰かにやられたのかな？」

「さあな、こんなところだったら何が居るか分からないしな」

「そうね、何が起きるか分からないよね」

（殴ったのはシオンな気が…）

（絶対に言っちゃダメよ）

（……了解）

「どうした？二人とも。何か知ってるのか？」

「いや、な、なにも知らないよ。それより、シオンが話あるみたいだよ」

「ふーんそうか。で、話ってなんだ？」

「あのね、最近誰かに見られてるような感覚がするんだけど…」

「シャノンは何も感じない？」

「視線か…俺も何か分からないが違和感は感じているな」

「違和感ってどんな感じ？」

「例えばだな…お前らの後を歩いているときとかに、首筋が急に

チクチクしたり、頭の中でぼわーんってなるんだ」

「なるほどね…やっぱ魔道師だったらそういうのに敏感なの？」

「大体はな。特に相手も魔道師だと大変なことになる」

「へえー。でも、大変なことになってないってことは、魔道師

には見張られて無いのね？」

「」

「ま、そういうことだ」

「それなら良かった…」

「全く良くないよ」

「で、マサキはなんか感じてるのか？」

「いや、僕は何も…」

「ま。普段は気を探るとかはしないからな」

「これからはちよくちよく探ってみるよ」

「よろしく頼むよ」

「さ、話も終わったとこだし、先に進みましょう」

「そうだ」

言いかけたところで、急に頭の中で声がした。

(ちよつと待って)

「うん？」

「今の声は？」

「どっかで聞いたことあるような…」

(まあ、そこでストップ)

「ここ？」

(そうそう)

と、言うと、急に俺たちの目の前にくるーい塊が出てきた。

こうなると俺は正体が分かった。

「もしかしてクルスさん？」

「やあ、よく分かったね」

「声と遠移特有のもやもやで分かりましたよ」

「さすがシャノン君」

「で、今回はギルド長自らがなぜ私たちの元へ？」

「それは、君たちがよく知っているはずだ」

「もしかしてペルソナの事ですか？」

「へえー。君たちはそこまで知ってるんだ…僕が来た意味がな

いよ…」

「ああ〜ごめんなさい」

「いやいや、用件はそれだけじゃないから」

「そうなんですか？」

「うん。ま、ペルソナの事に関わり無いんだけどね。これは、僕が前から密かに送り込んでいた偵察からの情報なんだけど、君たちの進行ルートを逆走するように大部隊が向かっているらしい」

「あの時のが…で、大体の数は分かるんですか？」

「ざっと千五百だ」

「四対千五百ですか…」

「四つてことは僕も戦わされるんだね」

「え！？そのために来たんじゃないんですか？」

「そのために来たんだよ？」

「さっきの言葉はなんですか？」

「いや、なんとなく…」

「ややこしいことはやめて下さい…」

「はいはい。で、計算によると、君たちがこのまま進んで、あつちも同じペースだと、少なくとも明日、このまま、僕たちが止まってる、2日後かな？」

「じゃ、今日の所は、ここに待機して作戦を練るか」

「まさか戦う気？」

「勿論だよ」

「勝てつこないわよ」

「その本があるだろ？」

「これで、ホムクルス錬金生命体でも造れと…」

「その通り」

「だろうと思って、リンとタンパク質、炭素、カルシウムは沢山持ってきたよ」

「さすがクルスさん、助かります」

「ありがとうございます。えっと…十分ですね、これなら十五体は造れます」

「良かった、これなら千五百に太刀打ちできそうだね」

「それってそんなに強いんですか？」

「強かったよ……」

「戦ったことあるんですか？」

「シャノン君はなんで、ホムンクルスが製造禁止になったか分かる？」

「いや、知りませんね……」

「よし、じゃあ話そう。あれは、十年前の出来事だった、17だった僕は、アクセルと一緒に、僕と同一年にもかかわらず、錬金術師ギルド長に就任し、錬金賢者の称号を得たりリリカにお祝いに行つたんだ。すると、リリカは何かの作業……つまりホムンクルスの製造を行っていたんだが、作業中に製造途中のホムンクルスが突如暴走、そのはずみで約千体近くのホムンクルスが暴れだしたんだ。勿論そのホムンクルス達は僕たち3人と他の錬金術師達のおかげで、何とか鎮圧したんだけど、それがきっかけで、錬金術によるあらゆる生命体の製造は禁忌となつたんだ」

「なるほど……あの人が自ら禁忌にしちゃつたんですね……」

「その通り、でも不思議なことにギルド長は罷免されなかつたんだ」

「そう言われると不思議ですね」

「彼女曰く、私に逆らえる錬金術師は居ないのよ。だ」

「あの人がいいですね……私も第一印象そんな感じでしたし」

「頼むから、彼女みたいなことは起こさないでね……」

「気を付けます」

「じゃ、早速とりかかってくれますか？」

「分かりました」

「じゃ、シャノン君はこの辺りの偵察に出てきてくれるかい？」

「了解しました」

「マサキ君は僕と敵を迎え撃つための作戦を立てるとしようか」

「そうですね」

## 第五話（後書き）

第6話は3人ごとに視線を変えて、分岐します

## 第6話 (シャノン)

「さて、クルスさんに言われて辺りの索敵兼探索を任せられたわけだが…」

だるそうにシャノンは辺りを見回した後、溜息混じりに呟いた。

「さっきまで砂漠に居たんだよなあ？俺」

そう、つい先程までシャノン達は砂漠に居たはずだったのだが、気がつけばシャノンの辺り一面が森と化していた。

「これも何か分らん力のせいなのかな？ついには向こうに山まで見えはじめたよ…」

凄い勢いで周りの環境が変化していくのに半分うんざりしながらも、奥へと進んでいくのだった。

「はあ…森は見飽きたって言うのに…何かこう変われ！！って思ったら景色変わらないのかな？」

バシユン！

「へ？」

シャノンが驚くのも無理は無かった、何故なら今、自分が思ったことがそのまま目の前で起こったのだった。

「ハハハ。偶然…だよな？確認の為にもう一回…今度は川でも創ってみるか」

バシユン！

「あれま。まさかホントに出てくるとはね…」

そこには、シャノンが思った通りに川が現れていた…この際、水はどこから？と思うのは無しにしておく。

「そうそう、そう言うツツコミは…あれ？俺は誰と話してたんだ？まあいつか、とりあえずこの力に関することを調べてみるか…」

バシユン！

バシユン！

バシユン！

バシユン！

「…ちよつと変えすぎたかな？」

シャノンが実験？と称して地形を変えまくった拳句、山、川、森、砂漠、草原などなど、滅茶苦茶な地形になってしまっていたのであった。

「まあ、複雑な方が守りやすいって言うしな…」

そうなのかは甚だ疑問だが、勝手に地形を変化させていたのでおそらくシオンや、マサキ達はパニックになっていることだろう。

「なるほど…これは自分が思う強さが強いほど、規模に変化が出るわけか…」

バシユン！

「ん？」

「あ、シャノン。ここにいたんだね」

「ああ、で、今地形を変えたのはお前か？」

「いや、私はただ木ばかりじゃ見にくいから森が無くなったら良いのになって思ったただだよ？」

「それだよ、どうやらこの場所だと自分の思った通りの地形に変えることができるみたいなんだ」

「ふうん、便利ね。で、この辺りが滅茶苦茶なのは適当に変化させたせい？」

「い、いやこれは守りやすいように作ったただだよ」

全然違うのにな。



「そして、自分の思う強さによって規模が変わるようなんだ」

「なるほどね、じゃ、私は材料採らないといけないからこれで」

「あれ？足りなかったのか？材料」

「あ、ちよっと調整の為にね。これって岩とかも試せるのかな

「？」

「わからん、じゃ、とりあえず俺はクルスさんに報告してくる

「よ

「わかった、気を付けてね」

「おう、シオンもな」

第6話 (シャノン) (後書き)

急に地の文の視点が変わってますが、パートが分かれたときに出てくる天の声だと思ってください。

ちなみに皆には聞こえてないはずですが…多分

## 第6話（シオンパート）

「うんしょつと。ふう、流石にこんなに量があると重いわね…」

そう言ってシオンが材料を運び終えた場所は、マサキ達と別行動とった場所から3キロメートルほど離れた場所だった。何故、このように離れた位置に陣取る必要があるかというところ、ホムンクルスは錬成時に大量のエネルギーを放出するため、その被害を防ぐために何も無い平地を利用するのである。これを怠ったため、某女性はこのエネルギーの発生によって暴走、惨事を招くことになったのである。

「さて、始めましょうか」

そういって、シオンは持っていた本を読み始めた。本には錬金術師独自の言葉でびっしりと書かれており、古くから伝わってる様で、ページの一枚一枚は日に焼けており、破れていたりすることもあった。

「なるほどね…：てつきりホムンクルスは単純な行動しか取れないと思っただけ、暴走しない限り言うことは聞くのね… うん？なにかメモ書きが…」

タンパク質を少なく、炭素を多くすることで、機動性があり、その逆になると、機動性は劣るがパワーが上がる。さらに、リンを多めに配合することで攻撃の仕方が変わり、カルシウムを多く配合することによって飛行能力がアップする、この二つに関しては私自身でも説明することはできなかった

「これは…リリカさんの字？これのおかげで大分助かりそうね。それにしても今ある材料じゃ調整ができそうにないわね…少し採りに行ってこようかしら？」

そういって、シオンは立ち上がると、いつの間にか周りが森になっっていることを驚きもせず奥に入ってしまった。

「あら？確か私は砂漠に…まあいいか。えっと、これとこれと

…結構落ちてるものね、後は小さい岩か何かがあるといいんだけど  
…ちよつと視界が悪いわね…見晴らしがよくなればいいのに」

バシユン！

「え！？一体これはどういうことなの？森が一瞬で　あ、シヤノン。ここにいたんだね」

「ああ、で、今地形を変えたのはお前か？」

「いや、私はただ木ばかりじゃ見にくいから森が無くなった  
ら良いのになつて思っただけだよ？」

「それだよ、どうやらこの場所だと自分の思った通りの地形に  
変えることができるみたいなんだ」

「ふうん、便利ね。で、この辺りが滅茶苦茶なのは適当に変化  
させたせい？」

「い、いやこれは守りやすいように作っただけだよ」。

「そして、自分の思う強さによって規模が変わるようなんだ」

「なるほどね、じゃ、私は材料採らないといけないからこれで」

「あれ？足りなかったのか？材料」

「あ、ちよつと調整の為にね。これって岩とかも試せるのかな  
？」

「わからん、じゃ、とりあえず俺はクルスさんに報告してくる  
よ」

「わかった、気を付けてね」

「おう、シオンもな」

「とりあえず岩も出せるか試してみましようか。確かシヤノン  
が言うには、念じる強さで規模が変わるって言ってたわね…小さい  
のがいいから弱く念じてみるとしましようか」

バシユン！

そこに現れたのは、岩…というには小さすぎた。石と呼ぶのが相応しい大きさだった。

「なによこれ！小さすぎるじゃない…まあ貰っておくとしようかしら。よし、コツもなんか良い感じに掴んだ勢いで、もう一回頑張りましょう」

バシユン！

今度は上手くいったようだ、高さはちょうどシャノン位で、周りの大きさも人二人分位の大きさと、採取するにはもってこいの大きさだったのである。と、いかそろそろ地の分が面倒になってきた。

「こらこら、そんなこと言わないの。って、あれ？私は誰に喋ったのかしら？まあいいわ、そんなことよりも、この岩、良い感じに出てきたじゃない、やっぱり私って天才？」

そんなわけは無い…はずである。

「さつきから誰かに見られてる様な気がするのよね…。でも、取り合えず材料調達と行きますか」

だが、シオンはすぐに採取に取り掛かろうとはせずに、岩の周りを調べ始めた。

「うーん、この辺りかな？」

そういつてシオンは、ポケットの中から何やら丸いものを取り出すと、岩のそばに置き、急いで岩の傍から離れ、そこに身を伏せた。

「あと十秒くらいかな？」

そういつて、おもむろに指で十秒数え始めると、0になった時に、岩がドオオオン！！という音とともに砕け散った。正直独り言でも、何が起るか言っただけ欲しいものだ。

「ふう、久しぶりにこれ使うと吃驚するものね。でも、おかげで良い感じに集められたわ。これでそろったし、戻るとしますか」  
そう言っていると、先ほどの場所に戻って行った。

第6話（シオンパート）（後書き）

だんだん地の文が私自身になってきちゃってます<>

## 第6話 (マサキ&クルスパート)

「あの、作戦を立てるって言うても、この辺りの地形が分からなきゃ、立てられませんけど、どうするんですか?」

「あ、そうだったね…じゃ、サボ…じゃなくて、シャノンが戻ってくるまで、話でもしようか」

「良いですけど、何を話しましょうか?」

「それじゃあ、今回の事件について、私なりに調べた結果でも話そうか」

「それは興味深いですね」

「では、いくよ。軍部や一般的には、あれは巨大な隕石だと言われているが、その正体は巨大な戦艦だ」

「戦艦?なら、落ちてきたときに何故、海があのように?」

「それは、僕にもわからないけど、考えられる理由としては、不時着時のエネルギー放出によるのが最大の原因だと思ってる」

「なるほど…では、不時着した時に何故奴らは救援を求めなかったのでしょうか?」

「それは多分こちらの責任だと思う。我々は調査するときに魔道師等を大量に送りこんだ、それを見た向こうは、「討伐しにきた」と誤解したんだ」

「で、あの結果ですか…」

「そういうこと、だから我々の調査を攻撃とみなした向こうは、此処からは君たちも知ってるから説明は必要ないね」

「はい、でも、この話を聞いたので、何か戦うのが気が引けますね…」

「向こうも滅茶苦茶にしてきたとはいえ、一応遭難者と一緒だからね…でも向こうが兵を派遣してきたというのなら、それだけ相手も本気だということだ、全力で相手をしてあげないとね」

「そうですね…僕たちがやられたら、レノアス閣下の所まで行



かれちやいますからね…」

「あ、そういえば居たね、レノアス」

「そういえばって、扱いが可哀想すぎますよ、あれでも一応盟主ですよ？」

「いや、実質、レジスタンス作ったの僕だし」

「そうなんですか…」

「嘘だよ」

「なんなんですか…」

「暇だし、ちよつとした掛け合いで…」

「要は行稼　ぎっ！」

「ふう…行って一体何のことだい？」

「いやいや、殴ってからじゃ全然信用できませんよ！」

「余計なこと言うからだよ」

「絶対何か知ってますよね？」

「全く…騒ぎ過ぎたら外の人に迷惑がられるからやめときなよ？」

「今のは完全にメタ発言と取っていいですよね？」

「ん？め…メタ？なんだいそれは？」

「…もういいです」

「勝った……」

「なんでこの人と喋ると疲れるんだろう…」

「全ては神のみぞ知る…」

「多分殆どの人が知ってます」

「シャノンまだかなー」

「なんかシャノンそっくりですね…」

「どの辺りが？」

「全部です…怖いくらいに全部です」

「やっぱり？よく言われるんだよね」

「そうなんですか？」

「うん、勿論嘘」

「いい加減にして下さいよ……」  
「仕方がないなあ、折角のつてきた所だったのに……」  
「左様ですか……ふう、寝たい……」  
「あれ？向こうから誰か来てない？」  
「あ、ホントだ……あれはシャノンですかね？」  
「多分そうだと思うよ？」

第6話 (マサキ&クルスパート) (後書き)

お久しぶりです^^

ちゃんと生きてますw

尚、この前PCのフォルダを整理していたら、昔の作品が出てきたので、投稿しましたので、そちらのほうもぜひ

## 第7話 (シャノン&クルス&マサキパート)

### 第7話 A

「ただ今戻りました、クルスさん」

「おかえり、シャノン」

「おお、やっと来たかシャノン君。で、どうだった？」

「少々でしたよ…もう一体何が起きてるのやら」

「どういうことだい？」

「言つよりも、見た方が早いと思います」

そう言つたシャノンは静かに目を閉じた。

「一体何が始まるんだろうね？」

「さあ？楽しみですね」

二人がそんな会話をしていると、シャノンが何やら踊っていたいや、おそらく合図をしていた。

「ねえ、マサキ君、シャノン君は一体何を言いたいんだろうか？」

「さっぱり分かりません、多分これからすることの為に踊ってるだけだと思いますよ」

「じゃ、もうちょっと掛かりそうだし、また何か喋っておく？」

「そうしま」

バシユン！！

『うわ！？』

二人の姿は、同時に叫んだあと、突如現れた川に消えていったのであった。

「え！？ちょっと、剣が！色んなものが！重たい！溺れるっ、助けてー！！」

「マサキ君大丈夫かい！？そんなことより、ロープ重っ！！水吸って重っ！！というか僕泳げないんだよっ」

「いやー、お二人とも楽しそうだなあ。ハハハ」

「クルスさん全然大丈夫じゃないですか！シャノンも変な笑い方してないで助けやがれ！！とにかく、早く岸に　　ってあれ？浅っ！この川めっちゃ浅っ！僕の腰までしかないよ」

「溺れるーここのカナズチを助けるー」

「クルスさん…浅いです、傍からみたら只のバカです」

「溺れ　　あ、ホントだ。いやー大導師ともあるう私がお恥ずかしい」

「見なかったことにするんで、先に進んで良いですか？」

シャノンがそう聞くと、クルスはしょぼんとした顔で「あ、うん」と答えた。

「つまり、あんた達二人にが今、身をもって体験した通り、どういうわけか知りませんが、地形を変えることができます」

「うん、言いたいことは分かったんだけど、何でいきなり？」

「合図しましたけど？」

「あの踊り？」

「踊ってましたっ？」

「なんとも楽しそうに。ねえ？」

「そうでしたね。まさか、合図だとは思いませんでした…ねえ？」

「ごめん、今から一個ずつ順番に俺の頭の中を整理していいか？」

『いつでもどうぞー』

「まず、いつからアイコンタクトで意思疎通ができる程仲良くなったとか、理由を聞いた俺が、何でアウエーなのかと　　」

「はい終了ー」

「しかも俺の扱いが酷い！！」

「まあまあ、シャノンも落ち着いて…ね？」

「そつだぞシャノン君、本題から脱線してるよ？」  
「誰のせいですか…全く」

「……………」  
「二人とも無言で僕を指差すのやめてもらえませんかねえ！？  
…それはともかくこれを上手いこと使えば、有利になると思うんで  
すよ」

「でも、シャノン。それは相手も使ってくる可能性があるよね  
？」

「幸いなことに、自分たちの周りしか、変えることができない  
らしい」

「こつちが向こうに突っ込んでいったら？」

「逃げるが勝ちって言葉が在ってだな」

「まさかの結末！？」

「まあ、何とかなるでしょ」

「それでいいの？」

「まあ、いいんじゃない？シャノン君が言ってるんだし」

「クルスさんまで…」

「まあ、あとはシオンが帰ってくるのを待つだけだな」

「暇だし何かします？」

「弾 ごつごつ？」

「クルスさん、帰りましょうか？マサキは？」

「クルマと呼ばれる乗り物を使った、競争でも…」

「送る場所は二人ともサハラ砂漠でいいよな？」

「……………トランプでいいです」

「それでも僕は弾」

「行ってらっしゃいませ」

「クルスさん！？」

30分後

「よっしゃ！フルハウス！！」

「僕はストリートフラッシュだね」

「また負けた…」

「僕が飛ばされてたのによくトランプ出来たねえ！！」

「あ、おかえりなさい。意外と速かったんですね」

「私に対する扱いが最近酷いのはあえて言わないでよくよ…」

「クルスさんもします？トランプ」

「大富豪で勝負だったらいいよ」

それからシオンが戻ってくるまでの間、クルスは負け続けましたとさ。

第7話 (シャノン&クルス&マサキパート) (後書き)

お久しぶりです^^

今週から期末なので、さらに更新が…新しいゲームも出ますし…

そういえば1000アクセス이었습니다^^

みなさんのおかげです、ありがとうございます

何かをしたいのですが何かありますかね？

質問でもなんでもかまいませんので、よろしければどうかお願いします^^；



## 第7話（シオンパート）

先ほどの場所に戻ってきたシオンは、一体どこから出してきたのか分からないくらいの大サイズの釜の前で本とにらめっこをしていた。

「最近これ使っていないから使い方忘れたや。確かこれと一緒に説明書が入ってた筈…あ、あったあつた」

『正しい錬金釜の使い方（初級編）』

そんなゲームのチュートリアルみたいな説明書を読み始めたシオンは夢中になってるのか、自分の近くに急に現れた川のせいで、材料が流れてるのに気づいていないようだ。

「あーっ、大事な材料が！」

流れゆく材料、追うシオン。続くこと30分…

「あぶないあぶあない、危うく全部流れる所だった…どうせシヤノンの仕業ね」

そう言っただけ、元の位置に戻り本を読み始めた。

「これがこうなるから　これをこうして　するとあれが…よし、わかったわ」

すると、突然ポイポイと先ほど拾ってきた材料を釜の中に投げ入れ、ぐるぐると中身をかき回し始めた。

「」

何故笑顔？

笑顔の理由こそ分らないが、だんだんかき混ぜてるうちに、気持ち悪い色になり、やがて泡が立ち、辺りが光ったと思うと、液体が少なくなり、中に入れた材料が徐々に形が整い始めた。

するとシオンはその出来かけの物体を釜から外にほうりだすと、それはむくむくつと大きくなり、街灯位の大きさになって止まった。

「ふう、完成ね。思ったより大きいわね。とりあえずちよつと隅っこの方に居てくれないかしら？」

ホムンクルスは手を上にあげると、ゆっくりと木陰に座り込んだ。そういつてる間にもシオンは次々とホムンクルスを量産していき、2時間後には、全体で12体が完成していた。

「材料もこれで終わりか…ちよつと予定とは数が違うけど…ま、いつか。それにしてもこれだけの量が皆木陰に座ってるのは異様な光景ね…とりあえず戻りますかっ」

シオンは立ち上がり、ホムンクルス達に号令すると皆一斉に立ちあがり、シオンに付いて行った。

## 第7話（シオンパート）（後書き）

一週間前に投稿したと思ってたら投稿できてませんでした><

## 第8話

「待たせたわね、みんな。……って大富豪してたのね……」

「ああ、それがクルスさんが弱すぎて殆ど俺とマサキのトップ争いだよ」

「仕方がない、僕はランプが苦手なんだ」

「あはは……それにしても後ろの怪物さんでかいね」

「一応十二体います。残りを探してみましょう。ヒントは縞模様服です」

「ウォー……?」

「あ、シャノン。この木陰にいたよー」

「うわ……本当に縞模様服……いや、ペイントか?これ」

「ここへ来る途中、暇だったので、塗ってみました」

「まあ、塗料とかの問題は聞かないでよくよ」

「さて、シオン君も戻ってきたことだし、どうしよう?」

「あれ?クルスさん私がない間作戦考えてくれてたんじゃないですか?」

「いや……それがね、シャノン君の発見で、作戦が立てられなくなっただ……」

「あー、相手も可能かも知れないってことですな」

「流石、察しが良いね。だから、僕の中では、一人三体ずつ操って、分散して各個撃破が理想だと思うんだ」

「作戦が成り立たないからそれしかありませんね……」

「よし、なら話は早い!俺が正面を行かせてもらう」

「そればかりはシャノンに任せられないね、ここは僕が行くべきだよ」

「確かにそうね……シャノンは一応魔道師なんだから分散した敵を狙ったほうが安心よ」

「……仕方ないな」

「シャノン君は見た目によらず素直なんだね……」

「こいつは昔からこうでしたよ」

「また今度シャノン君の事聞かせてよ、シオン君」

「いいですよ」

「三人ともそろそろ敵さんにかまってあげようよ……多分待つてくれていると思うよ……」

「向こうから攻めてこればいいのにな」

「それだと物語が続かないからじゃない？」

「ん？物語ってなんですか？」

「気にするなシオン。こういう人なんだ……」

まつたく……メタ発言は控えてほしいものだ……

「あれ？誰か喋った？」

「いや、喋ってないが……」

「僕も同じく……」

「僕もだ。きっと神様な存在が見てるんだろう、気にする」とはない」

「神様……ですか」

その発言に何かを思ったのか、シャノンが、シオン、マサキに對してアイコンタクトをとった。

（なあ、最近クルスさんが謎めいてる気がするの俺だけか？）

（そんなことないわよ、シャノン。私も最初はちょっと変わってるな……程度の認識だったけど、最近はなんか酷いわ）

（僕が思うには、早く帰ってもらった方がいいと思う、このままだとどどんおかしくなりそうだからね……）

（帰るって一体どこに？）

（シャノン……まさかここに来た目的忘れてないよね？）

（そういえば俺たちなんでここに来たんだっけ？）

（シオン……シャノンは放っておこうか……）

（目的忘れるようなバカは無視して進めましょうか）

二人からきつい言葉を浴びせられたシャノンは、心なしか落ち

込んでいた。まあ、作者（笑）がこの話を書き始めた時に、当初の目的を忘れかけていたなんてことは口が裂けても言えないのだが……（とりあえず、クルスさんは多分これが終わったら帰ってくれると思うからそれまで我慢だよ？）

（了解）

（オツケー）

「どうしたんだい？三人共、いきなり見つめあったりして……」

「あ、ああ、なんでもないです、さ、早く誰がどこに行くか決めましょうよ、俺とマサキは決まってるんですから、後は二人だけですよ」

「じゃ、私はマサキの左側から回り込む形で行くわ」

「では、クルスさんには敵の後ろに回り込んでもらいたいのですけどいいですか？」

「お安い御用だよ！」

「では、今から行動に移るとしましょう、全員生きてくださいよ」

『大丈夫だよ』

「おお！見事にハモった！」

「じゃ、またあとで〜」

こんなゆるい感じで大丈夫なのかは全く分からないが、四人はまた別々に行動したのであった。

## 第8話（後書き）

月一のペースなのにこの文章量&文章力…  
なんとというダメ人間…

## 第9話

1

「結局僕が正面、シャノンが僕の右側（と、言っても距離は結構あるけど…）、シオンが僕の左側（とはいえ…って何回もいいか…）、そして、変じ…クルスさんが敵の後ろか…上手く回り込んでくれているといいんだけど…」

この状況って地図書いた方がいい？そう…なら紙とペン用意して！真ん中に大きく丸書いて、その中に「敵」って書くわけですよ、そしてら、そこから下に降りて…そう、そこ！今あなたが指さしているところに丸書いて、中に「マサキ」って書く　ってもう書いたんだ…じゃ、次はそこから、斜め右上に移動させて、角度は大体20度くらいで、うん、そこ、え？シオンの場所はもう分かる？なら良かった…あ、これ後でまた使うかもしれないよ！？

「あゝもしかしたらあの黒い影は…敵！？こんな時こそこの飛行型とかいうホムンクルスか…ちゃんと言葉理解してくれるのかな…仕方がない、いつてきてね」

マサキは何やら長い葛藤ののち偵察に向かわせた。

ホムンクルスはすごい速さでで高高度を維持しながら飛んで行った。

「あーやつぱは凄いや…」

2



「全く…なんで俺が正面じゃないのだろうかね…」

（一体俺の何がダメだったんだ？まあ確かに、俺は一応魔道師だけどさ…たまには俺に任せてくれたっていいじゃん、流石に今回はクルスさんのこともあったから妥協したけど…）

（もしかしたら俺必要とされてないのかな… はっ！いかんいかん、ネガティブになってしまった…ポジティブになれる気もしないからとりあえず何かするか うん？あれは…敵だな）

「おい、確かあんたは遠距離型とかいったよな？」

遠距離型のホムンクルスは呼びかけに対し、頷いた（頷くという表現も変なものだが）

「じゃあさ、あいつらがあの辺りまで来たら牽制でも直撃でも構わんから一気にぶっ放せ」

そうして、ホムンクルスは射撃体勢に入って行った。

3

「……………」

……………

「……………」

……………

「……………」

……………

「……………」

うん、今ほどこっちの声が届かないことを後悔したことはなかった。

「……………」

さっきまで別行動してた時は結構喋ってたじゃん！？

「……………」  
「やばい…このままだと向こう側の人たちが暇だ…それにメタも多くなる……………」

「さて、瞑想も終わったことだし、ちょっと、その空飛んでるの、ばれないように偵察に行つてきなさい！そして遠距離は敵があなたの視界に入つたら遠慮なく御見舞してやりなさい」

瞑想中だったのか……………ふう、助かった。

「あれ？奇襲型はどこに行つたのかしら？確か連れて来た筈

あ、この下に居るわね…ちょっと出てきなさい　って、うわっ、ストップストップ！戻りなさい！ってダメ戻っちゃダメ！そうちよつとストップそこで待機よ」

まったく我が儘なことを言うお嬢さんである…まあ、いきなり地面が盛り上がったら誰だって驚きはするわな……………一度お試しあれ…

「えー……………気を取り直して、アンタは潜つて近づけるとこまで行つて、さっき私にしたみたいに地雷代わりになつてね」

ふむ…流石手際が良いな…ここは心配いらないだろうな…

4

「はい、と言う訳で早速敵の背後に移動するため、物凄い遠回りをしていくところです」

お前は何を言ってるんだ

あ、ところで、ちょっと前に書いた奴を目の前に広げろー、最初に書いたのに追加だー、シャノンの所から更に右にやつたところ辺りに丸書いて『クルス』って書いてけ。

「さて、ちょっと休憩する？」

そう言つたクルスは通常型の肩から降りて木に腰かけた。

「飛行型と奇襲型はもう着いたかな？あの二体は楽そうではないね…それに比べて僕たちは歩いて行くんだから…」

お前は全く歩いていないけどな！

「え？もう行くの？じゃ、ちよつとしゃがんでね」

ホムンクルスはしゃがんだ、そしてその肩の上に乗ると、御一行は先へ進み始めた…

「いや〜それにしてもなんか出てきてもおかしくないよね？」  
そういうと大体の場合出てくるものだ。

「でも、そろそろ何か出てきてくれないと僕の魔法が撃てないよ…只でさえ最近攻撃的な魔法は使っていないのに…それにこれで『ああ、クルスさんは必要なかったですね』なんて言われたら僕の存在が空気になっちゃうじゃん……レノアスとかよりは出番あるけど…」

確かに…本部の方々（アクセルさんとか、リリカさんとか、レノアスさんとかのお偉方）は全く出てきてないからな…大事そうな立ち位置なのに…

「まあ、いつか、後ろに回ったら合図あるまで待機だからきつと出番はあるよね！さあ、頑張ろう」

5

「で、向こうはどうやって動いてるのです？」

「それが…一度集まっていたのですがまたばらばらになったよ  
うです…」

「そうですね…不本意ですが、こちらも応戦するしかないのでしょうか…父上…どうか御守りください…」

「やはり当初の目的通りに動いた方が宜しかったのでは？」

「ですが…」

「その判断は貴女に任せます、私はあちらのトップを探す作業にでも移ります…」

「ええ、任せます」

厄介なことになってしまいましたね……まさかこんな事態になってしまつとは…早く事情を言いたいものです…

## 第9話（後書き）

夏休み最後の一週間ですので頑張ってみましたw

ああ…8月32日に行けるバグは現実でも使えるのでしょうかね……

と、というか、この話の書き方は初めてしましたね^^;

流石に5つのパート分け避けたかっただけなんですけどね><

こっちの方が楽なことに気が付きましたw

では、おそらくまた一か月後でしょうねw

月見バーガー…今年こそ食べてやる…

## 第10話

1

「さて、そろそろ敵も近づいて来たな…とりあえず近づかれても遠距離に待機させてるから大丈夫だとして、おい、その奇襲型と通常型…こっち集合！」

集まった残り二体のホムンクルスは何かを説明しているシャノンの言うとおりに動いていた…が、何やら苦戦しているようだ。

「通常はもうちょっと前に行って、奇襲は少し下に…：それで…動け…？…うーん？…やっぱりお前は…：」

こういうやり取りを繰り返していると、突然爆発音が聞こえてきた。

「！？今のはシオンの方向からか？よし！お前から頑張ってもう一回動いてみる！」

シャノンの命令を受けたホムンクルスはシャノンの周りを回りだした。

身体の一部を出して埋まっている奇襲型の上に通常型がサーフインをするようにのっている光景はなんとモジュールである、だが、シャノンはそれを見て喜んでいようである。

「よしっ！疑似騎馬の完成だな、俺たちも早速迎撃の準備に入るか。どうやら敵さんも大分迫ってきてるみたいだな。まあ、目の前の敵に先手が取れないのは仕方がないがな…：」

先ほどの爆発の少し前、シオンの待機場所ではシオンが偵察に向かわせた飛行型の帰りを待っていた。

「さて、そろそろ飛行型も帰ってくる頃でしょうね…それにしても流石に一人は暇だわ。奇襲型の代わりに通常型を持ってこればよかったわ、喋り相手にもなるし…：…ん？そういえばマサキはどうやってホムンクルスの言葉理解するつもりなんだろう？魔道師組は魔法で読み取れるって文献に書いてあつたけど…私やマサキは道具が要るのに…渡しそこねたわね… あ、ちょうど良い所に戻ってきたわね」

帰ってきた飛行型はシオンの前に止まると、結果を報告（？）した。

「なるほどね、少しずつこっちに近づいているのね…遠距離の射程には？そう、あと少しね…それだけかしらね？えっ？最後に一つ？一体何なの？ 敵は人じゃない！？それは一体どういうことなの！」

シオンが慌てているので、代わりに説明。

飛行型が言いたいのはつまり、『相手は、人では無いです、おそらく私と同じホムンクルスでしょう、それも人の半分くらいの大ささの。』ということである。

「なるほどね、ならこの勝負勝つたようなものね…なんたつて勝負事にはパワーよ！！」

などとシオンが何故か暴走気味になっている時、少し離れた位置に居た遠距離型が突然砲撃をした。

「え！？もう視界に入ったの？私からは黒い靄さえ見えないのに…まあ、このまま全滅させるつもりでいつちゃって良いわよ！

あ、そうそう、これをマサキの所にいそいで持って行って！」

飛行型はシオンから預かったものを手に持つとマサキのいる方

角へ飛んだいった。

「さて…と、私も準備しますか。久しぶりに弓を使うわね…大丈夫かしら？」

そう言いながらシオンは向こうの方に小さく見えている果実に向かって狙いを付けると、ヒュン！という音とともに発射された矢が果実のど真ん中に当たっていた。まるで与一だ。

「腕は鈍っていないわね…敵が来るまでまた瞑想しますか…」

3

一方、マサキの所では偵察から戻ってきた飛行型と何やらトラブルが発生しているようだ。

「もう…何言ってるかさっぱりわかんないよ…シオンももうちょっと詳しく説明してほしかったよ…。でも、さっき爆発したからもうダメだろうな…ん？あれは飛行型？一体何 ってこっちに来た！？」

突如飛来した飛行型ホムンクルスは、マサキの前に止まると、一通の手紙と何やら怪しげな四角い物をマサキに手渡した。

「一体これは？とりあえず手紙を読んでみるとしよう あ、君は急いでシオンの元へ帰って行ってあげて」

帰っていく飛行型を視界に残しつつ、手元にある手紙を開けていった。

『急いであるから要点だけを簡単にはなすよ。いま、マサキが持っている四角いのは、ホムンクルスの通訳機だから、それを近づけてホムンクルスと会話してね。』

「なるほど…とりあえず聞いてみようか」

(ヤット、カイワガデキルヨウニナリマシタカ…)

「そうだけど…せめて漢字変換くらい出来るようにしてよ！



！読みにくいっいたらありやしない…で、結果は？」

（ハイ、ソレガ、テキノシヨウタイハニンゲンデハアリマセン、コガタデハアリマスガ、ワタシタチトオナジホムンクルスデス。オソラクキビシイタタカイニナルデシヨウ…）

「まあ、そんな事だろうとは思っていたよ。でも、それだけ頑張りがあるってmondだよ！（それに、僕は正面を預かってるんだから…負けちゃいけない…）みんな！頑張るよっ」

4

「さて、やっと回ってきましたよ、僕のターンが」

お前はなにを言ってるんだ…こいつ、私の事が分かってるんじゃないんだろうか…そろそろやばいぞ…色々。

「ま、独り言もこの辺りにして、調べたことを纏めておくか…」  
クルスは紙とペンを取り出すと箇条書きで纏めていった。

『・現在地、敵後方

・目的、敵部隊の挟撃、及び奇襲

・敵の種類、透視の結果、小型のホムンクルス

・敵配置、マサキ、シオン、シャノン、それぞれに戦力を分散、恐らくこちらには気づかない模様

・交戦状況、シオン方面より一度爆撃発生、大規模戦闘には至らず、こちら側の牽制の可能性大』

「こんなところかな？珍しくまともに書いたから疲れたよ…（あ、シャノンに伝えた方がいいかな？確か飛行型は持ってなかったはずだし…心話の用意でもするか）」

（もしもし、聞こえるかい？シャノン）

（クルスさんですか、聞こえますよ）

（そうか、君に伝えることが一つだけある。敵について、だ）

(もしかして人じゃないんですか?)

(その通りだ、小型の歩行型ホムンクルスだ、私がりり力の件で戦った奴と酷似している)

(なら、かなり危険なのは...?)

(数で迫られるとね...一体一体は弱いから、纏めて潰す方法が有効だね、マサキ君が心配だが...)

(なら、八卦炉の出番ですね...マサキなら大丈夫です、内緒ですが、アイツの剣には細工がしてあります)

(ほう...楽しみにしておくよ...)

(了解しました、また、心話で合図しますんで、大導師の力をみせちゃってください)

(わかってるよ...では)

(はい...)

クルスの真面目もーどを久々に見た気がする...

5

「トップはまだ見つからないのですか？」

「ええ、これはもう戦うしかありません...先ほどあちらから牽制射撃がありました、ホムンクルスとは言え、小型です、大型相手では分が悪いです」

「そうですね...ですがホムンクルスを退かせてはなりません」

「あれは、絶賛暴走中ですからね...」

「まさか墜落の衝撃でああなるとは...私たちも良く生きていたものです...」

「生き残ったのは私たちだけでしたからね...姉上」

「ええ、奇跡です。ですが、何故ホムンクルスがあそこまで部隊を...?」

「小型は統率力ありますからね…大型は命令に忠実ですが、団  
体での統率力は小型の方が上です」

「そういうことだったのね…それにしてもそれだけの錬金術師  
…是非私たちの国に来ていただきたいです」

「全くです…」

## 第10話（後書き）

テンション下がります……

いや、まあ明日から学校再開なんですけどね、いきなりテストなんですよ……

英語苦手なのに……

なので、多分次話は先になると思います><

あと、次の話はメインじゃなくて、本部の方々も出してあげようかと^^^；

外伝その1　〜その1と言っても最初で最後〜

これは三人がクルスと合流した少し後の本部でのお話。

「なあ、レノアス」

「どうしたんだ、アクセル？浮かない顔して」

「いや、楽しそうな顔してるのも変だと思っぜ……」

「まあ、そうだな。で、用件は？」

「ああ、送った部隊の内、一組を除いて連絡が途絶えた」

「やはりそうか……それで、残った一組と言っのはどこの部隊だ？」

「聞いて驚くな」

「ええ!!」

「ベタだなあ！おい！ってか、お前、最初に比べてキャラ変わってないか？」

「こうでもしないと毎日が暇だな」

「もつと他にやることあるだろ！」

「勿論鍛錬はしているぞ？」

「いつやってるんだよ……」

「そんなことより話が逸れているぞ？」

「お前のせいだよ!!」

「ふざけてないで、早く話したらどうだ？」

「はあ……何でこんなに疲れてるんだ……俺。まあいい、本題に入るぞ」

「確か残った一隊についてだったな」

「そうだ、そして、残った奴等って言っのが、あの新米どもだ

……」

「シャノンとかいう奴のところか？」

「ああ、そうだ、ついこの間連絡があったそうだ」

「内容は？」

「順調に進んでいるようだ、途中で謎の組織に属する者と交戦したらしい」

「なるほどな……まあ、無事で何よりだ」

「全くだぜ」

二人がそんな会話をしていると、奥の方にある部屋から、一人の女性が歩いてきた。

「あら、二人して何の話？」

「お、リリカじゃねえか、体力は大丈夫なのか？」

「いや、部屋からここまで50メートルちよいよ！？」

「でも、お前引き籠りじゃん」

「う……それは……」

「おい、アクセル。これでもこいつはレイピアの名手だったんだぞ？」

「過去形！？今でもちゃんとやってるよ！」

「なら見せてもらおうかりリカよ」

「望むところよ！レノアス！」

「お二人さん、盛り上がっているとこ悪いが……やめておけ」

アクセルはチラッと隅っこの方を見た。

その方向を見てみると、掃除担当らしき人物が今にも泣き出しそうな顔でレノアス達の方を見つめていた。

「お前ら、いつも暴れたら辺りを滅茶苦茶にしてくだろ……」

「確かに……いつもクルスに後片付けやら色々やらせてたわね

……」

「そうだったな……そういえばクルスはどこに行ったんだ？いつもなら会話していたら決まって入って来た筈だが……？」

「クルスならシオンの所に行ったわよ？」

『ええっ！！』

「あら、あなたたち聞いてなかったの？もう、あの子たちしか残ってないから付き添ってくる」って行って出て行ったわよ？」

「聞いてないぞ？なあ、レノアス」  
「いや、聞いては無いが数日前に手紙を預かったような気がする」

「なんて書いてあったんだ？」

「いや、まだ読んでないんだ、何せ眠たかったもので……」

「あんたそれでも盟主か！！」

「この二一トが……」

「リリカだけには言われなくなかった……まあいい、とりあえず今から持ってくるよ」

レノアスは自分の部屋に入っていくと、5分くらいして、戻ってきた。

「さて、開けるぞ」

「ああ、早くしてくれ」

「レノアス君へ」

「え？君」

「いや、書いてある通り読んだだけだが……」

「ホントだ書かれているわ……」

「じゃ、続けるぞ」

「あなたと出会って3年、とても楽しい日々を過ごして行きました。出会ったころの私は、とても口数が少なくて、なかなかクラスに馴染めずいました。でも、そんなときに、話しかけてくれたのがあなたでした。それからというもの、私の気持ちは常にあなたに惹き付けられていました。そして、月日が流れて、あなたと離れ離れになってからようやく気付きましたあなたの事が好きだということに。あ、これ大分前に貰ったラブレターだった」

『おいしいおいしい！！』

二人が同時に叫んだあと、アクセルがそのまま言葉を並べた。

「なんでそんなもん持ってきてるんだ！しかも、ある程度いい感じの所まで読んだよな！？ってか、誰だよそいつ！俺達知らなかったぞ？」

「あ、この子は俺の嫁だ」

「奥さんかよっ！」

「ああ、昔は可愛かったもんだ……」

「……昔は？じゃ、今はどうなの？」

「今はなあ……ホントに人使いが　　って、えっ！？」

「人使いが人使いがどうしたのかしら？あ・な・た」

「……」

（死んだな、レノアス）

（ええ、死んだわね）

（大丈夫でしょうか、レノアス閣下……）

さて、今のこの状況を説明しておくとするか……

レノアス：ガクガクブルブル、冷や汗だらだら

アクセル&リリカ：真っ先に危険を察知して回避

クリニング：掃除担当、現在アクセルとリリカの二人と一緒に

避難中

レノアスの奥様：いや、ホント怖　　綺麗な方です、はい、そ

うです。

「なんで……お前がここに……」

「私の能力を忘れたとは言わせないわよ……」

「まさか……あの能力を使ったというのか……」

「いやいやいや、そんな能力持ってませんでしたよね！？マイさん……」

思わずリリカがツツコム。

「まあ、嘘だけどね」

『ですよねー』

満場一致の意見



「で、話を戻すけど、最近の私は人扱いがどうなの？」

「い、いや、俺の事をよく考えてくれると思います……はい」  
「そう、なら良かったわ」

（レノアス、俺たちがちょっと空気戻してやってなかったら、  
今頃死んでただろうな……）

（悪い、助かった……）

（今度ご飯奢りだね）

（幾らでも奢るよ……）

「で、なぜマイさんはここに？」

「そうだぞ？確かお前は地上に居た時にはぐれて、クルスに頼んで安全な所に離れた筈……」

「実はクルス君がちょっと前に私の所へ来て、この近くに送ってくれたのよ」

「そこから歩いて来たのか？」

「ええ、クルス君は「では、この後用事があるので」って言うて遠移を使ってどこかへ行っちゃったわよ」

「送ってくるのは良いがちゃんと送ってこいよ……クルス」

「それにしても私の手紙を取っていてくれるなんて」

「あんなもの捨てるわけないだろうが」

「嬉しいわ……うえ……」

「自分で言うて吐き気はどうかと思うぞ？」

「えー……お二人とも悪いのですが……」

「どうした？アクセル」

「いや、クルスの手紙はどうなったんだよー！！」

「もう、どうでもいいや」

「クルス可哀そうすぎるわー！！」

「ま、いいだろ……そんなことより、マイ、久しぶりだからゆっくり話そうか」

「ええ、そうしましょう。じゃあね、二人とも」

「あ、はい」

「……一体なんだったんだ……？」

「さあ……あんたはどう思う？」

「いや、僕に聞かれても困るんですが……」

そのあと3人で楽しく駄弁つたとき。

「いつら……こんなんでいいのか？各ギルドのトップとして……」

外伝その1　くその1つて言っても最初で最後く（後書き）

……なんじゃこりゃ？

というか昨日「次話は一月後かもしれません」

つて言つてたやつ誰だよ……

今度こそ来月かも…

## 第11話

1

爆発、と、同時にシャノンの命令が響き渡る。

「よし！お前ら、ようやく暴れられるぜ！遠距離型はここに待機して後方支援を頼む。奇襲型！俺も乗せてっってくれ。さて……楽しくなつて来たぜ……」

シャノンはその言いながら、奇襲型の上に乗ると通常型とともに敵陣へ突っ込んで行った。

「さて、敵はホムンクルス！容赦なくできるな……人間相手でも邪魔するなら容赦しないけど……」

奇襲型が敵に近づいてる時も、遠距離型の援護は止むことなく、確実に敵の数を減らしていった。

最初の砲撃時から、シャノンが到着するまでの間に、おそらく一万はいたであろう敵は、四分の一がその姿を消していた。

「おっと、もう到着か、早いな。それにしても、遠距離型は結構頑張ってくれたな……よし、お前らはそのまま進んで交戦してくれ。俺はここから魔法で援護する！」

奇襲型はシャノンに命令されると、通常型を乗せて、敵に突っ込んでいった。

シャノンはそれを見送ると、自分の周りまで集まって来たホムンクルスを相手にするために身構えた。

「さて、流石小型か……機動力は高いな、あつという間に周りに囲まれたぜ……ま、とりあえず、一発お見舞いしてビビらせるか！……ビビるか分からないけど……」

シャノンはその言いながら、呪文らしきものを唱え始めた。

「さて……前から一回言ってみたかったんだよな！！この名前」

「いくぜ！エターナ フォースブリザード！！」

……言っちゃたよ……こいつ。

とはいえ、やはり魔法学校トップと言うことだけあり、威力は申し分なかった。

さらに、名前に合わせて、氷の魔法を使ったらしく、辺り一帯は凍りつき、最前列や、その近くのホムンクルスは全て消えていた。

「いやー、楽しかった。夢は叶ったし、あとは、残ったのを潰していくか……残りはざつと干か だけど凍りついてるしな……炎だな」

すると、シャノンはいつも通り、呪文を唱えると、流石に二回目は無いらしく、次は無言で手を振るうと、辺りに火柱が立ち、次々とホムンクルスを焼き尽くしていった。

「さて、殆ど片付いたな……まだ生きているのを追いかけるのもな……性に合わないから止めておくか。で、あいつらは……お早いお仕事で……」

ホムンクルスは、というと、シャノンがあ魔法を叫んでいるときには、既に半分近くを吹き飛ばしていた。

奇襲型が通常型を降ろした後、潜っては出、潜っては出を繰り返し、通常型は群がるホムンクルスどもを、まるで、蚊でも追い払うかのように、吹き飛ばしていった。

さらに、遠距離型の攻撃も入ることにより、シャノンが二発目を撃つ頃には、既に片付いて、こちらに戻ってくる途中だった。

「よし、皆集まったな。今からマサキの方に合流するぞ！只、奇襲型と通常型は、マサキの所に到着したら、すぐにシオンの所まで援護に行け！遠距離は、マサキの所からシオンの方面を狙撃だ！みんな、行くぞ！！」

「さて、向こうもそろそろ近づいてきたようだから、僕たちも迎え撃つてあげようか」

マサキはそういうと、背中から剣を引き抜くと、近くにあった木に向かって一振りした。すると、つい、さっきまで立っていた木は、綺麗に倒れていた。

「よし、切れ味は大丈夫だね……みんな行くよ!!」

そう言ったマサキは、敵の方に歩いて行った。

道中では、既に敵の先遣部隊が派遣されていたらしく、時折、マサキ達に襲いかかったが、まるで小さな虫でも払うかのように一掃していった。

だが、それでも、数が多いようで、数を重ねていくことに、少しずつではあるが、敵を倒すスピードが落ちてきていた。

それでも、前に進み続け、敵の本隊の近くまで来るころには、肩で息をしている状態だった。

「はあ……はあ……流石にこの数の相手はしんどいよ……多分千は倒したと思うよ? ねえ?」

(オソラクソレクライハタオシタデシヨウ、ワタクシタチホムンクルスハダイジヨウブデスガ、アナタニハシヨウシヨウキツイデシヨウ)

「少々どころじゃないよ……そろそろ休ませてほしいよ」

(オヤ、ムコウカラ、マダ、ナニカキテイルヨウデス)

「え!? まだくるの?」

(エエ、ソレモカナリオオキイヨウデス)

「大きさは分かるけど正体は分からないんだね……来るよ!!」

(キラツケテクダサイ)

「分かってる　ってシャノン!!」

「お、マサキか、大丈夫か?」

「これ見て大丈夫だと思う？さつきから連戦だよ……僕も人気者になったものだね」

「それは御苦労なこった、さて、お前ら！！さつき言った通りのことをしとけ！俺はこいつを少し回復させてやるから」

「シャノン白魔術使えるんだ」

「応急処置程度にならな。動くなよ」

そう言うと、シャノンはマサキとの会話を続けながら、応急処置を行い始めた。

「わかった、ありがとうシャノン。で、ホムンクルス達はどこに？」

「ああ、あいつらにはシオンの援護に回らせた、あいつも普段は強そうにしてるが、女だからな……やっぱり心配だ……」

「それなら僕の事は放っておいて、シオンのところへ行ってきなよ、おかげで大分ましになったよ」

「バカ野郎ッ！！死にそんな奴放っていけるかよ！！」

「大げさすぎるよ！！ちょっと休憩しないで戦ってたただけだからー！」

「そうなのか？」

「そうなのだ」

「ふーん」

「あれ？いきなり扱いおかしくない！？」

「そうか？」

「結構冷たくなってるよ？」

「だって、軽い疲れって言うから、もう大丈夫だなんて思っ  
な

「うわ……これって治療してもらってなかったらキレていいよ  
ね……？」

「理由なくキレる最近の若者は怖いな」

「原因あんたなんだけど……！」

「そんなことより、敵がそろそろ目の前だぞ？」

「え！？嘘？うわ！ホントだ……仕方がない、シャノン、援護してよ！」

「全く……さつき大技使ったから結構疲れてるんだぜ？まあいい、その前に、シオンの所に行くようにクルスさんに言っておく、それまでこっちに近づけないでくれ」

「わかった……もし、僕が死んだら枕元に立ち続けるからね？」

「それはお前の責任だろうが、ほら、早く言ってこい、すぐ行くから」

「了解」

マサキはシャノンに別れを告げると、目前に迫りつつある、敵の方へ向って行った。

「早く来てよ……シャノン」

(サテ、ワタシモヒトシゴトシマスカ)

「頼りにしてるよ、さて……叩き切るよ！！」

マサキは叫びながら、敵陣に突っ込むと、先ほどの応急処置が効いているのか、明らかに、動きが違っていた。

(戦う前よりも身体が軽い？)

(それに、剣の重さも全然違う……)

(だけど、弱くなるどころか、威力も上がっている？)

(一体これは……)

「危ないぞマサキ！！後ろだ！」

声と同時に振りかえると、接近してきた少し大きめの敵にのしかかられた。

「え！？うわっ！」

「そこから……どけえ！！」

もう一度、声が出たかと思うと、次の瞬間には、マサキの背中が軽くなっており、ついでにひんやりしていた。

「やっぱりシャノンか、ありがとう……二つの意味で……」

「全く……急いできてみればホントに死にかけてるなんてどういふことだよ……とりあえず一旦退くぞ」



シャノンには、マサキを担ぎながら、遠移で敵から離れていった。

「ごめんごめん、ちよっと身体に違和感を感じて……」

「違和感？」

「身体軽くなって、剣も軽くなって……そしたら倒されて……」

「あゝ先に説明しておくべきだったな……俺の、いや、白魔術で応急処置する時は、他の所に魔法を施しておくのがマナーってものなんだ」

「あー……言ってたような気がする……」

「おいおい、それでもトップかよ……」

「殆ど実技でカバーしてたからね……」

「ダメだこいつ」

「やっぱ酷っ!」

「とにかく、クルスさんはシオンの所に向かってくれているから、俺たちはあいつらを何とかしよう」

「了解、シャノンは後ろから援護よろしく」

「任せろ、じゃ、敵さんの目の前まで運んで行くぞ、しっかりとつかまれ」

「変な運び方だけは無しの方で……」

「そんなことは、俺の知ったことじゃない」

と言いながら、いきなり遠移で先ほどシャノンと別れたところまで運んで行った。

「着いたぞ、マサキ」

「気持ち悪い……吐きそう……」

「全く……あらかじめ準備くらいしておけよ」

「いきなりじゃ対応できないよ!」

「ほら、ゴチャゴチャ言っていないで、さっさと戦って敵の親玉のどこまでいくぞ!」

すると、さっきは敵の後ろから援護と言っていたにも関わらず、マサキ一人を置いて、どんだんに前に進んで行った。

「シャノンのキャラとかが色々おかしくなってきたよ……」

「おい、早くしないと全部取っちゃうぞ?」

「それでも構わないよ……別に競争してるんじゃないし……」

「そっか、ならお構いなく行かせてもらっぜ?」

どうやっているのかは知らないが、言葉を言うと同時に、詠唱を始め、喋り終わると、シャノンの両手には火の玉が握られていた。

「お好きにど『ヘルズボルケイノシユート!』……」

先ほどの様にまた痛い感じのことを叫ぶと、敵はおるか、周りの木々も焼き払っていた。

「シャノン……何も一発で決めなくても……それに、見てて恥ずかしいよ……あと、ちゃんと消火活動はしてね」

「はいはい、じゃ静かに消せばいいんだよな?」

すると、シャノンはただひたすら黙々と木に点いた火を魔法で消していった。

「うわ……地味だ……」

「お前が静かに消せて言ったんだろ?」

「やっぱり、さっきの発言無しで」

「まったく……面倒くさいやつだぜ」

「まあまあ、とにかくシオンのとこに急がないと!」

「確かにそうだな……クルスさんが間にあつてればいいが……」

「きつと間にあつてるよ!あれでも大導師なんだから」

「そうだな……自分の大先輩を信用しないなんてどうかしてるな、俺は」

そう言いながら二人はシオンが戦っている方向へ走って行ったのであった。

## 第11話（後書き）

お久しぶりです。

死んではいません、死んだのは話です……

いろいろあつてですね……（いやネットゲなんですけどね……）  
ホントに申し訳ないですorz

## 第12話

「それにしても数が多いわね……」

シオンはそう呟きつつ、他の場所より少し高い丘のような所の木陰に座り込んでいた。

「まだ戦っては無いけどこのままじゃ苦戦するかもしれないわね……。かといって、ここにどまり続ける訳にもいかないし……。ま、とりあえず一応奇襲型に地雷代わりに埋まってもらってるし、砲撃も任せてあるから近づいて来たら分かるわね、それまで待機よ」  
そう言うと、またもや瞑想を始めた。

それから二〇分が経った頃、突如、遠くの方で爆音が鳴り響いた。

「この爆発はもしかしてシャノン!? そっか、もう動いてるのか……。それにしても、こっちは全然近づいてこないわね……。何か怪しいから……。ちょっと飛行型? 少しこの辺りの見回りをしてほしいんだけど?」

(リヨウカイシマシタ)

飛行型のホムンクルスは命令されると、すぐに飛び立って偵察に向かったのであった。

「さて、私もそろそろ準備をしておかないと……。弓じゃ流石に困まれたら終わりだからね」

するとシオンはおもむろに立ち上がり、弓の手入れを始めた。  
どうやら弦の張りの調子を見たり、射る時に用いる矢のチェックをしているようだ。

シオンが手入れを初めて五分もしないうちに、先ほど偵察に向かった飛行型ホムンクルスが戻って来た。

「あら、おかえり。早かったのね、で、状況はどうなの?」

(ハイ、テキハ、イゼントシテコチラへ、チヨクシンシテマイリマス。ホウゲキノコウカカラカ、サキホドヨリ、カズハヘツテオリマス)

「なるほどね……すると、もしかしてそろそろ地雷に引っ掛かるころじゃないの?」

(オソラク、コノチヨウシダト、アト、イツブン、トイッタトコロデシヨウカ)

「ちよつと地雷近すぎたかしらね……もうちよつと奥にやっても良かったかも知れないわ……」

などと考えているうちに先ほどの爆発よりも近い所で轟音が鳴り響いた。

「お! やつと引っ掛かったわね、よし、私たちも本格的に行動しましょう! さあ、みんな思う存分暴れなさい!」

シオンの命令によって先ほどの飛行型は敵めがけて一直線に向かって行った。

そしてそれに続くように、他のホムンクルスも走って行った。

「え? なんか数が多い?」

と、言つとシオンはホムンクルスの数を数え始めた。

「やっぱり多いわ……もしかしてシャノン達かしら? ということは……二人とももう終わったのかしら……?」

すると一匹の飛行型が紙きれを一つ啜えてシオンの元へと降りてきた。

「あら、これは……この汚さからしてシャノンね」

この手紙見てるんだつたらそつちには俺たちのホムンクルスが到着してるな。

そして俺たちもそつちへ向かおうとしている。

だから俺たちが到着するまでは持ちこたえてくれ。

最後に、こいつをクルスさんの所へ届けてくれ、但し、この紙

をもう一度コイツに渡してから飛ばすんだぞ。

では、健闘を祈る。

「わかったわ……シャノン。よし、もう一仕事頑張ってね！」  
手紙を読み終えたシオンは言われたとおりに飛行型をクルスの元へと行かせた。

「シャノンが遠移を使ってくれれば仮定しても三分近くは持ちこたえないと……それまで寄せ付けないようにしなくちゃ……よし、私なら出来るわ」

そう言ったシオンは弓とレイピアを持つと、戦場とは少し離れた高台に登って行った。

シオンがそんなことをしてるちょうどその時、深い森の中では相変わらずクルスがシャノンからの指示でシオンの所へ向かいつつ、状況によっては、合図で一気に攻めることができるように、移動していた。

「さて、最近はデスクワークが多かったからね、腕が劣ってなければ良いんだけど……とにかくシャノン君には負けたくないかな。さっき物凄い魔力を感じたからね、かなりの大技を使ったに違いない……」

「どうやらクルスは大導師の意地でシャノンには負けたくないらしい。」

クルスがそうやって後輩に負けたくない、愚痴をこぼしていると、飛行型のホムンクルスがやって来た。

「うん？あの紙から魔力が……シャノン君かな？」

先ほどシオンが読んだ紙をクルスが手に取ると、紙が突如として光り出し、空中に文字が浮かび上がった。

「なるほどね……もう暴れていいんだ……それにしてもなんでわざわざルーン文字で連絡する必要がある？ たんだろ？ ま、そこは深く考えないで、久しぶりに暴れちゃうよ！」

そう言っただけでクルスはホムンクルスを連れて遠移で中心地まで飛んで行ったのだった。

そのころシオンはかなりの窮地に追いやられていた。

どうやらシャノン達の到着に時間がかかっているらしく、まだシオンの所へは来ていない。

そして、シオンも矢が無くなったために、敵地へと入りこんで行ったのである、だが、やはり女性であるシオンにとっては数が減っているとは言え、大量のホムンクルスを相手にするのはきつい様だ。自分たちのホムンクルスも戦ってはいるのだが、シオンが居る所よりも少し離れているようで、援軍は来る気配が無かった。

そして、敵に囲まれ、孤立したシオンは、肩で息をしながら呟いた。

「……困まれちゃったよ……シャノン達には悪いことしたね……折角再会出来たって言うのに……またすぐにお別れになるなんて……もうダメね、諦め」

「おい、随分と弱音吐くじゃねーか。いつも通りの男勝りなシオンに戻れよ、おい」

「え!？」

「まったく……折角僕が酔いそうになりながらも助けに来たのに……そんな弱気じゃダメだよ?」

「二人とも……」

「さて、マサキ、酔いは大丈夫か？俺はさつきから大技使いすぎて温存しとかないと最後に動けん、悪いが一人で頼む、俺はシオンの軽い応急処置をしておく」

「酔いは多分大丈夫。ざっと見た感じ数百でしょ？軽いよ、これぐらい！」

と、笑いながら言うマサキが囲んでる敵からシャノン達を守るように動き始めた。

「マサキ！一人で本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だよ！どうやらホムンクルス達の方に何匹が向かってるからね、問題はないよ」

「マサキ、俺たちには軽い防御結界を張っておいた、思う存分暴れてこい」

「了解！！」

すると、マサキは敵に向かって突っ込んで一通り暴れたあと、また別の敵の団体へ向かって行つては暴れてを繰り返した。

これを二、三周したあたりで、周りを囲んでいた敵はいなくなっていた。

「ふう、終わったよー」

「おう、お疲れ様。どうだった？俺の援護は？」

「やっぱりかなり軽いね、また頼むよ」

「次はクルスさんのもとへ行ったら掛け直そう」

「二人とも、クルスさんはどうなったの？」

「あの人は今頃敵本拠地に向かつてるだろうから、後はホムンクルスに任せてすぐ向かおう、幸いこの距離なら遠移を使わなくてもすぐ着くだろう」

「わかった、じゃ、早くいこうか」

「そうだな」

そして、3人は遂に敵の本拠地へと向かって言ったのだった。



## 第12話（後書き）

失踪はしてません、生きてました。

事情により続きが書けず、さらには書き始めても経過を覚えていなかったのでもう一度1から読み始めてた結果このような事態になりました。

そろそろ最後ですが、伏線（）笑を全部回収できるかどうかがプレッシャーです……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8453k/>

---

平行幻想

2011年5月31日20時57分発行